注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
高町飛鳥は夢をみる

【作者名】
御神の犬士

【あらすじ】
高町なのはに双子の弟がいる。ただそれだけのお話。

第一話　よく似てるって言われます

慣れ親しんだ電子音が、まどろむ意識を現実へと引き上げる。自身の意識を離れた手が音の震源地へと向かうが、その動きは酷く緩慢であり、その様は動く死体（リビングデッド）のようだ。

どうにか、という形容詞が付属されそうな時間の経過と共に標的を手中に収めると、躊躇うことなく音を切る。

まるで呼吸するかのように平然と、何の感情の発露も見られず息の根を止めるその手腕は、稀代の暗殺者を髣髴させる。

「ん～」

一仕事を終えた必殺仕事人は、その御業とは正反対の可愛らしい一息を吐くと再び身を、意識を闇へと沈める。

そこはどこまでも静寂で、暖かく、どこか母の腕の中を思い起こさせた。

このとき既に外界の情報の大半は遮断されており、五感の受容器は意味をなしていなかった。

霞む、翳む、意識がかすむ。

思考能力が急速に低下し、自我は容易く闇へと呑み込まれ――――

「起きろ」

光に包まれた。

「にゃわ!?」

突然の光の嵐、更には全身を包んでいた温もりは幻の如く消え去っており、替わりに冷気が肌を無言で刺していた。

自身の環境状態の急速悪化に伴い、肉体が精神を叩き起こす。

意識が強制的に組み立てられ、間抜けな悲鳴を上げさせられた主は元凶に問い質すべく、慌てて周囲を見渡す。
見慣れた自身の部屋が網膜に映し出され、視線を動かせば、閉められていた筈のカーテンはいつの間にか大きく開かれていた。
窓の外には雲一つない快晴が広がっており、小鳥の囀りが朝の来訪を告げていた。

「起きたか、寝坊助」
「寝坊助じゃないよ、まだ時間はしちっ!?」

文句の一つでも垂れようと、眉間に僅かな皺を寄せながら抗議の声を上げようとするが、眼前の光景に思わず口を閉ざしてしまう。
現状を生み出した諸悪の根源、その位置は特定できている。しかし、その姿を見ることは適わない。
それは何故か。
理由は単純明快、憎き犯人に囚われた人質が盾となっているためだ。
同じ床に眠る良き伴侶、聖剣(アヴァロン)の鞘、その温もりが未だ微かに肌に残っている。その微熱に、思わず小さな拳を震わす。

「私の理想郷(ふとん)〜っ!」
「これがあったら何時までも起きないだろう」

ホレ、という言葉と共に人質は解放された。いや、快投された。

「ふぎゅっ」

勢い良く放り投げられたパートナーを受け止めきれずに潰され、思わず間抜けな声が漏れる。再会の抱擁に夜(いつも)なら、有無を言わずに付き合うが、時と場合だ。
名残惜しそうに、されど鬱陶しげに布団を退かすと、自称哀れな被

害者はようやく姿を現した極悪人の面を拝む。
馴染み深い顔立ちだ。付き合いも然ることながら、根本的な要因として、その骨格が挙げられるだろう。
とにかく似ているのだ、自分と。
顔だけではない、その体格も殆ど大差ないといって良い。むしろ他人からすれば、何処に違いがあるのかと思われるかもしれない。
何せ、私たちは双子だ。
しかし、違うのだ。髪型だって違うし、目の色だって違う。そして何より違うのは――

「もう朝食が出来ている。あとはお前待ちだぞ、なのは」
「だからって酷いよ。お姉ちゃんに対してこの仕打ちはどうかと思うのですが？」
「ならば毎度弟に起こされないようになってから言ってもらいたいな」
「う～飛鳥（あすか）のいじわる」

高町なのはが女で、高町飛鳥が男であるという点だ。

高町飛鳥は夢をみる　第一話　～よく似てるって言われます～

「お、お待たせ～って、あれ？」
「おはよう。どうした、なのは」

慌てて制服に着替えて来たというのに、食卓に着いているのは僅か一名。
我が家の大黒柱である高町士郎さん。爽やかで恰好良い私のお父

さん。今はコーヒーを啜りながら新聞を広げており、穏やかな時が流れていた。
とてもまったりとした時間の過ごし方だが、それはいつものこと。会社員ではなく喫茶店の主人（マスター）である父はこの時間をこの上なく愛していた。

「お父さん、おはよう、お兄ちゃんたちは？」

飛鳥にお前待ちと言われ超特急で駆け付けたのに、到着すれど姿はなく空席が否応なく目につく。更によく見てみれば、食卓に未だ料理が並べられていないではないか。

「おはよう、なのは。あらあらそんなに髪を乱して」
「おはよう、お母さん」

笑顔で髪を直してくれているのが、高町桃子さん。綺麗で優しい私のお母さん。喫茶「翠屋」の菓子職人で、ケーキと特にシュークリームが絶品で地元海鳴市でも人気な一品です。
私もお母さんの作ったシュークリームは大好きです。

「確かにもうすぐ料理は出来るけど……また飛鳥（あすか）ね」

桃子は困り顔を浮かべているが、その口元は緩んでいた。視線をずらせば士郎も小さく笑っていることに気付く。このやり取りは何も今日始まったものではない。
高町家にとって見慣れた日常の一場面（ワンシーン）であり、平和の象徴に他ならない。

「もう、お母さん何処！」

誰が、とは言わずともだ。

「道場にき「行ってきます！」いってらっしゃい」

母の言葉を遮り、なのははズカズカと少女らしからぬ足並みで居間を後にする。

ぷんぷん、と頬を膨らませながら退出する愛娘を桃子は笑顔で見送る。その顔に映るのは慈愛の二文字。

「なのはは相変わらずだな～」

いつの間にか新聞を閉じ、目に入れても痛くない娘の後姿を眺める士郎の口元は酷く緩んでいた。

「飛鳥もですよ」

飛鳥がからかい、なのはがむくれる。なのはが双子の姉なのだが、その力関係（ヒエラルキー）は見事なまでに逆転している。

度が過ぎれば流石に親も不安を覚えるものだが、その点について両親（ふたり）は何の心配もしていない。

自分達の子育てに自信がある、と自惚れている訳ではない。子供たちを信頼している、確かにそれもある。

しかし、何よりもその根幹にあるのは飛鳥の存在だ。少々一般人とは異なる高町家において尚、高町飛鳥（あすか）は異端であった。

されど、二人はそのことに何の不安もない。我が子を愛する、ただそれだけのことだった。

「桃子も相変わらず綺麗だ」

「士郎さんも恰好良いですよ」

リビングに甘酸っぱい空気が急速に広がるが、それを咎める者も止める者も残念ながらこの場にいない。

高町士郎と高町桃子、ご近所でも有名なおしどり夫婦の朝は大抵これが定番である。

◆　◇　◆　◇　◆

「飛鳥(あすか)!!」

勢いよく扉を開けると、そこには目にも止まらぬ速さで木刀を打ち合う男女の姿があった。

少なくともなのはの動体視力では二人がどのように闘っているのか、全く把握できていない。ただ、絶え間ない打撃音と足音の合唱を聞くのみだ。

しかし、いつも思っているのだが天井に足跡が付くのは一体何の冗談なのだろうか。忍者と言われたらなのはは何の疑いを抱くことなく、いやむしろ大いに納得することだろう。

分かっているのは、ただ一つ。

自分には逆立ちをしたって出来ないということだ。

自身の声が合図かのように、両者は鍔迫り合いから一気に互いに間合いを広げると、木刀を下げ一礼する。どうやら、今日の朝練はこれで終わりのようだ。

「おはよう、なのは」

「おはよう、なのは」

爽やかな声と柔らかな声、なのはにとってどちらも大好きな声だ。

「おはよう、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

爽やかな声の主は高町恭也さん。高町家の長男で、御神(みかみ)流っていう剣術の師範代をしています。流派の正式な名前はもっと長いらしいですけど、よく覚えていないです。とっても強くて顔も良い、でも勉

強はちょっと苦手な私の自慢のお兄ちゃんです。
柔らかな声の主は高町美由希さん。高町家の長女で、お姉ちゃんも御神流を修めています。最近は腕を上げているようでお兄ちゃんも「そろそろ一本取られるかもな」とかぽつりと零していました。
模擬刀でドラム缶を簡単に斬り裂くようなお兄ちゃんを相手に、です。
正直、人間辞めていると思います。お姉ちゃん。
その運動神経を百分の一でもいいから分けてほしいものだ。って——

「お兄ちゃん、飛鳥は来なかった？」

当初の来訪目的をすっかり失念していたなのはは、再燃した怒りと共に兄に問いかける。

「来たぞ、朝食が出来たんだって？」
「そうだよ、その後は？」
「居たぞ」
「何処に？」
「此処に」
「此処!?」

恭也の想定外の言葉に、道場内を凝視するが弟の姿は影も形もない。そもそも、見通しの良いこの場所に身を隠せることなど果たして可能なのか。
もしやからかわれているのではないか、という考えが一瞬なのはの脳裡を過ぎる。涼しげな顔とは裏腹に意外と悪戯好きなのだ、この兄は。

「お姉ちゃん！」

ここで現状で最も信頼できる情報源に問いかける。というのもこの姉の場合、嘘がとにかく下手なので、例え騙そうとしたところで簡単に見破れる自信がなのはにはあった。
妹の鋭い眼光に美由希は瞼を二、三度瞬かせ、そして何故かなのはを生暖かい眼差しで見つめながら答える。
「恭ちゃんって真顔で平然と嘘吐くからね。確かに信用しにくいけど、さっきの話は本当だよ。ついさっきまで、なのはの隣に」
「嘘⁉」
「ほぅ……美由希、なかなか言ってくれるじゃないか」
「しまっ……痛っ！」

恭也のデコピンに敢え無く撃沈した姉を尻目に、なのはは視線を左右に振ってみるが、やはりその姿は皆無である。しかし、美由希の瞳は嘘をついてはいなかった。でも、だからといって普通、隣に人がいたら気付くだろう。

そう、普通ならば――

「早くしないと朝食が冷めるぞ」
「はにゃん⁉」

耳元からの突然の囁きに、なのはは全身の毛を逆立て全身を震わす。慌てて後ろを振り返ってみればそこには、忌々しいぐらいに平然とした飛鳥（おとうと）の姿があった。

「飛鳥！」
「ちゃんと起きたようだな」
「ここまでされて起きない訳ないでしょ！」

未だ心臓は激しく脈打っており、落ち着くまで幾許の時間が必要だ

ろう。深呼吸を繰り返し肉体と精神を落ち着かせようとするなのはを尻目に、飛鳥は恭也に非難の視線を送る。

「兄さん、あまり姉さんを苛めないでくださいよ」

「うぅ～恭ちゃんと違って優しいな～飛鳥は」

床に突っ伏す美由希は弟の愛に涙した。実際は未だ引かぬ痛みによるものが大半を占めるが。

弟の視線に恭也は何故か、悪戯小僧のような笑みを浮かべる。

「そう言うな飛鳥。これは馬鹿弟子への愛情表現であり、苛めなどでは断じてない」

「嘘だ～」

「お前も今朝なのはにしただろう、それと全く同じだ」

恭也と飛鳥の視線が交錯する。それだけで、二人は解り合った。

「なら仕方ないですね」

「「よくないよ!!」」

姉妹は抗議の声を高々と上げるが、頷き合う兄弟の耳にはまるで届かない。

「そろそろ行くか」

「えぇ、早く戻らないと居間が大変なことになりそうですし」

「そうだな。仲が良いのは構わないが、朝からは流石に自重して貰わないとな」

恭也は眉間に皺を寄せる。いくら親とはいえ朝からイチャイチャされたら敵わない。そもそも恭也は味だろうと雰囲気だろうと甘いもの全般を苦手としていた。

「まぁ兄さんも人のことは言えませんがね」
「……そんなことはない」

一瞬、声に詰まる兄を飛鳥は小さく肩を竦めるが、深くは追求しなかった。

「なのは、行くぞ」

呼吸を整えつつある姉に飛鳥は声をかける。ようやく平常状態に戻ったなのはは口を窄め、眉を顰め無言で抵抗を示していた。

「恭ちゃんはもう少し妹の労い方というものを覚えた方が良いと思うよ？」
「調子に乗るなよ、馬鹿弟子が。そういう台詞はせめて俺から一本取ってから言え」
「またそう言って無茶を言う～。弟子（いもうと）にも人権を～！」
「そんなものはない」
「ひどっ!?」

仲睦まじい恭也と美由希の会話が徐々に遠ざかっていく。遠ざかる二人の後姿を背に、飛鳥は不満を顔にありありと浮かべる双子の片割れに溜息を吐く。

「なのは」
「……」
「なのは」
「む～」

なのはは頬を膨らませて目を背ける。すっかりご立腹な姉に飛鳥は頭をかく。どうやら彼女の我慢の限度を超えてしまったらしい。

早急に、なのはの不満を吐き出さなければ、父とＯＨＡＮＡＳＩをするハメになる。無駄な体力と気力の消耗は避けるべきだとは飛鳥の持論である。
姉をからかうこと早数年、生じる問題への対策に抜かりは存在しない。
飛鳥は不敵に笑うと、優雅な仕草で人差し指を一つ、天へと突き立てる。

「Ｃ１」
「Ｃ２ぷりーず」

なのはは首を振り、Ｖの字を掲げる。その仕草に飛鳥の眉が微かに釣り上がる。

「Ｃ１シュー１で」
「……プラスＤで許してあげる」

傍から見れば意味不明の会話だが、二人の意思疎通は完璧に行われていた。
暫し無言の間、先に折れたのは飛鳥（おとうと）の方だった。

「了解、それで手打ちだ」
「やった♪」

どうやら話はついたらしい。天井を指していた少年の指は眉間に寄った皺を労うように伸ばす。
先の不機嫌顔は何処へやら、満面の笑みを浮かべるなのはに飛鳥は微かに頬を緩ませる。

「やれやれ、私のタダでさえ軽い財布を更に軽くさせるとは……とんだ悪魔だ」

「む～、飛鳥！　女の子を悪魔なんて呼んじゃ駄目だよ！」
「大丈夫だ、なのは以外には使わないから安心してくれ」
「そんなことだけ特別扱いしなくていいよ！」
「なのはは我が儘だな～」
「飛鳥が意地悪なだけだよ！」

二人はいつもの口論を繰り広げながら道場を後にする。

「もう、今日のこと二人に言いつけちゃうから！」
「なのは、止めるんだ。弟がどうなってもいいと言うのか」
「知らない！」

割と本気で困っている飛鳥を置き去りに、駆け足で立ち去るなのはの口元には確かに笑みが浮かんでいた。
そんなじゃれ合う小さな姉弟に小枝に乗った二羽の雀は囀る。その声は何処かからかいを含むような、軽快な音を奏でていた。

◆　◇　◆　◇　◆

「準備は出来たか？」
「うん」

その言葉に導かれるように、私は身を持ち上げる。踵を叩き、靴のズレがないか確認すると目の前の男の子に頷く。
高町飛鳥（あすか）、高町なのはの、私の双子の弟。

「忘れ物は？」
「問題なし！」

並んで立てば傍から見れば同じ身長にしか見られないけれど、実は私の方が一センチだけ高かったりする。姉の数少ない弟に勝る点の

一つだ。
私たちはよく似ていると言われている、しかし、私はそうは思わないし、思えない。
確かに見た目は私が言うのもなんだが、そっくりだ。何せ、二人が揃って同じ格好に同じ髪型にしてみたら、親友の二人でさえすぐには気づかなかった程。周囲の人間が私たちを似ていると思うのも無理はない。
けれど、いくら器(がいけん)がどれだけ同じに見えようと、その中身は似ても似つかない、完全な別物だ。
飛鳥は頭が良い。テストの点で勝ったことは入学して今まで一度としてない。得意の算数ですら同点で、苦手の国語など目も当てられない。
飛鳥は運動も出来る。逆立ちすら出来ない私にはまるで魔法のような神業を、まるで当然というかのように軽々とやってのける。
文武両道とは正に弟を指す言葉だろう。罷り間違っても私に向けられるものではない。
そのことに対する弟への嫉妬心はない。何の努力もなしにその結果なら、そんな感情が芽生えたのかもしれないが、共に時を重ねているのだ。机に向かっている時間も、汗を流した時間も知っている。だから羨むことはあれど、嫉妬することは有り得ない。
ただ胸の内に溜まるのは弟に対する劣等感。

『何故、飛鳥に出来てなのはに出来ないのか』

とは誰も言わないし、家族のみんなはそんなことを微塵も考えていないだろう。
しかし、私自身が思ってしまう。何故、弟(あすか)のように出来ないのかと。
なまじ、見た目がそっくりなだけにその想いが日に日に積もっていく。
もし、飛鳥には出来ず私にしか出来ない、ないしは私に圧倒的に優

れたものが一つでもあればこのようなものを抱えなくても良かったのかもしれない。
しかし、神様は残酷だ。飛鳥に出来て私に出来ないことはいっぱいあるのにその逆は、皆無に等しい。
テレビゲームの腕前など、自慢するだけ虚しくなるだけだ。
勉強もスポーツも家事も、何もかも姉(わたし)は弟(あすか)に劣る。

「それじゃ行くか」
「うん」

だから、私と飛鳥を確かに分けるこの服が好きだ。
私が通う聖祥(せいしょう)付属の制服は当然、男子と女子で形状が違う。ふわりと舞う純白のスカートが、私の心を僅かに軽くする。色調は同じでも、確かに異なる。
私と飛鳥のように。

「それじゃ、行ってくるよ兄さん」
「あぁ」

今日の見送りはお兄ちゃん。お父さんとお母さんは店の準備で、お姉ちゃんは先に学校に行っていて、この場にはいない。大学生である兄は、最初の授業がないときの私たちの見送りを率先して買ってくれている。

「お兄ちゃん、行ってきます」
「気を付けていくんだぞ、なのは」
「うん」

兄の言葉に笑顔で応える。飛鳥と同じだけど、確かに違うその対応に胸が弾む。

「私に対して「気を付けて」、はないんですね」
「弟子を甘やかす程耄碌していないつもりだがな」
「成程、つまり妹は存分に甘やかすと。すずかさんに良い話が出来そうです」

飛鳥の言葉に兄の鉄仮面に罅が入る。僅かに引き攣る頬が可笑しくて思わず吹き出してしまう。

「余計なことを言うなよ、飛鳥」

兄の眼光に危ない色が宿る。美人が怒ると怖いというが、美形が怒ってもまた怖い。タダでさえ冷たい雰囲気を携える人だ、睨まれると相当の迫力がある。自分に向けられていないというのに、その余波だけで思わず飛鳥の背後に回ってしまう。

と言っても、生まれてこの方、お兄ちゃんに睨まれたことなど一度もないんだけどね。

「未来の義妹（いもうと）に何を今更隠すことがあるんですか。まさかとは思いますが幼女趣味に目覚めた、なんて言わないで下さいよ。忍さんにどう言えばいいのか……」

しかし、凄いのは飛鳥だ。兄の凄さを知っているというのに睨まれようが何処吹く風、自然体であの兄をからかっている。

兄に似たのか、中々な豪胆さと言える。

同時に、無謀とも。

「がっ!?」

突如、苦痛の声を上げたかと思えば飛鳥は額を抑えて蹲る。盾（あすか）が折れたことにより兄の顔が良く見える。その冷厳な眼差しに思わず体を震わせる。思わず目を逸らすと、一本の針が玄関に落ちているこ

とに気付く。
兄が投擲した針が弟に命中、弟悶絶、検証終了。
「無駄口を叩いていると乗り遅れるぞ、さっさと行け」
「了解(ラージャ)」
兄の氷塊の如き圧力のある言葉に、飛鳥は覚束ない足取りで立ち上がる。未だ額を抑えていることから、相当痛いのだろう。
「お、お兄ちゃん行ってきます！」
兄の言葉を聞かずに、私は慌てて扉を開く。もう片方の手は私を悩ます憎いヤツを引き連れて。
私に良く似て、でも似ていない。たった一人の私の弟、高町飛鳥(あすか)と共に、高町あのはは今日も頑張ります。
「わわっ」
「なのは、何もないところで躓くんじゃない」
「め、面目ないです」
前途多難な私に、幸あれ。

第二話　アイツは昔からそうだ

不規則に揺れる車体はどうしてこう、人の眠気を誘うのだろうか。催眠装置の一つでも積んでいるのかと、くだらない冗談がアリサの脳裏に一瞬過ぎる。徐々に幕を閉じようとする瞼を鞭打って、眼を意地でも開かせる。

バニングス家の後継者たる自分がこの程度の誘惑に屈してなるものですか。

「なんだか眠そうだね」

しかし、顔を繕ったところで隣に座る少女にはお見通しのようだ。有象無象に悟られるならば自尊心（プライド）の一つも傷つくが、見抜いたのが親友ならば致し方ないというものだ。

「えぇ、寝る前に軽い気持ちで本を読んでいたんだけれど限の良いところが中々見つからなくて、ね」

「それで最後まで読んでしまった、と」

「Ｅｘａｃｔｌｙ（正解）」

「ふふっ、アリサちゃんらしいね」

小さく微笑むその姿は同性の自分の目から見ても可愛らしい。柔らかな物腰と控えめな態度、正に絵に描いたかのような完璧な淑女（レディー）の姿に心中で小さく溜息を零す。

最近クラスにいる数名の男子（ガキ）の友に向ける視線に色が混じっている。全く、今更男と女を意識し出したお子様を相手にしなければと思うと気が滅入る。

だが、私がやらなければならない。

今は遠巻きに見ているだけなのでさほど気にならないが、その内直接アプローチをしてくる輩が出るのはほぼ確定事項だ。この年齢時

の男子の気の惹き方は、女子にとっては迷惑以外の何物でもない。
降りかかる火の粉は払わなければ、傷つくのは自分達だ。

傷物など、させるものですか。

「すずか」
「ん、何？」
「私が守るからね」
「ありがとう？」

思わず握られた手と私の言葉に首を僅かに傾げつつ、すずかは頷いてくれた。
彼女の名前は月村すずか、私の親友の一人だ。
私とは対極の、貞淑な女性の理想像。私にないものをいっぱい持っている素敵な女の子。
友達となるきっかけも、それが欲しかったから。
今にして思うと我ながら、何とも幼稚な思考であのような暴挙に出たものだ。二年前の自分に会うことが出来たなら、問答無用で張っ倒すところだ。
しかし今更考えると、今の私とすずかの関係はまるで夢や幻のように、本来有り得ない可能性なのではないだろうか。少なくとも私とすずかだけでは、このような関係にはなっていない。断言できる。
すずかと友達になっていなかったら今頃私はどうなっていただろうか。
鼻持ちならない嫌な女になっていたのは、まず間違いないだろう。
あの娘(こ)には感謝してもしたりないわね。

アリサは窓辺に流れる景色を眺める。見慣れた光景を瞳に映しながら、その心は一人の少女を思い描いていた。
穏やかで明るい、ひまわりのような誰からにも好かれる女の子。少

女の笑顔が鮮やかに蘇る。
ふと意識を現実に戻すと、流れいた景色が徐々に輪郭を濃くしていた。バスが緩やかに速度を落としており、気付けば見慣れたバス停はもう目と鼻の先にあった。
車輪が回り、回り、止まる。と同時に車体前方の扉が開かれ、そこからリボンで留められた栗色の髪が視界に入る。通路に躍り出たその少女の顔に浮かぶ表情は、アリサの頭に浮かべていたものと寸分違わぬものだった。

「おはよう、アリサちゃん」
「おはよう、なのは」

彼女の名は高町なのは、私のもう一人の親友だ。
最後尾に陣を敷いていた私は、僅かに席をずらし空いたスペースを軽く叩く。語らずとも、それだけで彼女(なのは)には伝わる。
なのははいつもの笑顔を振り撒きながら指定された席に座ると、すずかとにこやかに言葉を交わす。
アリサにとってすずかとなのは、この二人が日常の象徴であり、三人揃うことで初めて世界が音を立てて動き出す。
今日はどんな一日になるのか、少女は期待に胸を膨らませる。
その時、すぐさま視線を彼女たちへと移せば良かった。そうすれば、この心は未だに弾んだままだった筈だ。
しかし、もはやそれはＩｆの話であり、夢物語だ。アリサの瞳は乗車する一人の人物を確かに捉えてしまっていた。
それによる少女の心境の変化は激変の一言に尽きる。
満たされていた筈の心が急速に萎れていき、胸の熱が急激に低下する。その寒さのせいだろうか、アリサの眉間には浅くない皺が寄っていた。
そう、この娘(なのは)が乗ったならば、アイツが乗るのもまた必然ではないか。その程度の予測すら出来ないとは腑抜けたか、アリサ・バニングス。

理性が浮ついていた自身を痛烈に批評する。

「「アリサちゃん？」」

その声を打ち消すように自分の頬を叩いて気合を入れるアリサに、なのはとすずかは疑問の声を上げるが、彼女の視線の先に立つ人物を知ると、二人して納得すると同時に苦笑を浮かべる。

そんな親友たちの気遣いにすら気づかぬほど、アリサは視線の先に立つ人物を凝視していた。

これが少女漫画ならば、二人の間に華々しい花や光で溢れるところだが、現実は違う。甘酸っぱくなるような雰囲気は微塵も存在せず、少女の視線は何処か危険な熱量を放っていた。

アリサは視線を外さない。相手は未だ自分を見ていないが、目を逸らせばまるで私がアイツの視線を恐れたように見えるではないか。

このアリサ・バニングスがアイツに屈するなど、あってなるものですか。

目は口ほど物を言う、という諺（ことわざ）がある。確かに少女の視線は彼女の心中を現すかのように熱く鋭い。

されど、それだけで相手の心を読み取れる者は果たして何人いるだろうか。言葉でさえ受け手の取り方一つでその意味合いは大きく変わる。それが視線ではいかほどのものか。

少女の熱烈な視線に当てられて、一人の少年がゆっくりと瞳を移す。

視線が混じり、一つとなる。

少年の澄んだ瞳に、少女の瞳が僅かに揺れる。

一瞬の空白時間、思考を刹那の間奪われたことをアリサは自覚する。何たる屈辱、容易く射竦められた自身を叱咤し、眼により一層の

力を込める。
まるで睥睨するかのようなその眼光に、気の弱い者は反射的に目を逸らすことだろう。
だが、少年は違った。
口元には僅かに笑みを浮かべながら、ゆっくりと近付いてくる。

来るんじゃないわよ、と声高々に言ってやりたい。しかし、それは無理な相談だ。相手は親友(なのは)の弟であり、すずかも心許す数少ない異性の友人だ。それを拒絶できるわけがない。
親友たちへの配慮ももちろん理由の一つだが、何より眼前の少年を拒めない一番の理由は、これ以上自身の弱さを露呈してしまうことが我慢できないからだ。

そう、アリサ・バニングスは弱みを握られている。

だが、それで言いなりになるような弱い女ではないことを証明してみせる。不屈の闘志に燃える少女はされどその心を完璧に覆い隠し、少年を優雅な笑顔で出迎える。

「おはよう、飛鳥」
「おはよう、アリサ嬢」

アリサ・バニングスの一日(たたかい)が幕を開ける。

高町飛鳥は夢をみる　第二話　～アイツは昔からそうだ～

眉間に皺を寄せながら、アリサは眼下のノートを睨みつける。それ

はさながら、親の仇と言わんばかりの形相だ。
教師が黒板に淡々と文字を書いているが、それを書き留めているようには見えず、実際彼女が記しているのは授業とは完全に別の事項だ。そもそも彼女にとって、学校の授業の内容など既に復習以外の価値を見出せておらず、内容についていけない、という事態に陥ったわけでは断じてない。
では、何について悩んでいるかといえば、彼女の悩みの種と言ったら一つ以外に存在しない。

高町飛鳥。アリサ・バニングスの不倶戴天の敵の名だ。

なのはが聞いたら泣きそうなので決して言わないが、そう評するが適切だと思うほど、アリサは飛鳥という少年に対し敵対意識を持っていた。
だが、言うほど敵愾心を抱いている訳ではない。むしろ有象無象の男子と比較すればすこぶる飛鳥への評価は良いほうだ。
そもそも、人間は好意だろうと悪意だろうと、相手への意識なくして感情の発露は有り得ない。つまり、飛鳥への感情は正負のベクトルを別にすれば、彼女（アリサ）にとって相当な高い位置に存在していることになる。
それをアリサは否定しない。でなければ、こうして悶々と悩まなくて済むのだ。
思わず少女の瑞々しい唇から小さくも重い溜息が零れる。

まぁ、第一印象がアレじゃねぇ……

シャーペンを器用に回しながら、アリサは意識を過去へと飛ばす。
人間、認識をそう容易く変えられるほど器用に出来ていない。頭では理解できているのだが、感情がそれに伴ってくれないのだ。
あれから早二年、我ながらいい加減吹っ切っても良いと思うのだが。

……止めよ。

ペンを机に置くと、案の定寄ってしまった眉間の皺を揉み解す。こんな気苦労で皺など作ったら泣くに泣けない。

再度溜息を吐くと、アリサは眼下のノートに目を走らせる。先程までペンを走らせていたそれは、彼に対する情報の数々だ。

客観的に、あるいは主観的に、高町飛鳥という少年に対して記してみたのだが、身長、体重、血液型など気付けば彼(あすか)の簡易プロフィールのようなものが出来上がっていた。我ながら何で知っているのかと思う情報もあるのだが、その理由は一先ず脇に置いておく。ついでに頬の熱も。

重要なのはそのような表面的なものではなく、より内面的な部分だ。

勉学：私と同位、つまり学年一位。忌々しい……

本当に忌々しいヤツ。小さく付け足された文字に心底同意する。横目に見れば、前方に座る彼は教科書を開き、ノートにペンを走らせていた。

しかし、アリサは知っている。飛鳥が黒板の内容を書いている訳ではないということを。

そもそも、この程度の内容、アリサは完璧に覚えているのだ。自分と同じ主席である飛鳥(ヤツ)が同様のことを出来ない訳がない。注視してみれば立てられた教科書の内側にもう一冊本が広げられており、何やらそれに対して書いているようだ。

そのことについて教師に告げる、という選択肢は少女の中に存在しない。そんな姑息な告げ口で気が晴れるわけもなく、むしろそのような手段でしか見返せないのかと思われるほうが遥かに問題だ。

どうせ飛鳥のことだ、間接的に授業に関連のある書物を持ち込んだに違いない。

アリサは不機嫌そうに鼻息を一つ吐く。
飛鳥は自身の知識(ちから)を進んで誇示しようとは決してしない。腹立たしいことだ。

アイツは昔からそうだ。

優秀であることを表には出さず、謙虚な姿勢を崩したことはアリサが見た中で一度としてない。
注目されたい、人気者(ヒーロー)になりたいという子供が当たり前に持つだろう英雄願望を飛鳥(アイツ)は持ち合わせていないとでも言うのか。
そんなことはない筈だ。ただ、大人なだけ。それがアリサには非常に不愉快であった。
そして残念なことに、その不快な点を少年は幾つも持っていた。

運動：常に学年トップ5入り

そう、アイツは運動も出来る。勉強と違ってトップ、という訳ではないが、それでも常に上位に食い込んでいる。私も運動は割と得意な方だが、アイツには劣る。
当然悔しくはあるが、男と女、肉体スペックに元から差があるので、それほどまで悔しく感じることはない。それでも負けていることに何も感じないわけではないが。
それより、少々気になることがアイツの動きだ。
どうも動作の一つ一つに余裕があり過ぎるように見える。一流の運動選手(アスリート)でもない私(しろうと)の目など、何の当てにもならないが、そう見えるのだ。
やっかみによって目が曇っているとは考えたくないが……どちらにせよ、文武が優れているのは間違いない。そこは認めよう、現実から目を背けても何の解決にもならない。
勉強も出来て、運動も出来る。大変素晴らしい、しかし人格に問題はないだろうか。どれだけ優秀な成績を修めようと、人間としての品

位を養っていなければ、それは真に優れた者とは言えないだろう。

人格：温和で理知的、思慮深く情に厚い

その性格の良さはクラスは勿論、教師陣にも知られており、喧嘩の仲裁に駆り出されるのは割と日常茶飯事であり、男女の橋渡しや他クラスとの交渉などその働きは多岐に渡る。

「我ながらべた褒めじゃない」

アリサはがくりと頭を垂れる。まるで理想の男子を妄想しました、と言ったら容易に信じられるプロフィールの数々に少女の頭に鈍痛が走る。

文武両道、品行方正。これだけでモテない理由（わけ）がない。しかし、人はどれだけ内面が優れていようと外見でまず人となりを判断するものだ。

そして、アリサにとって非常に残念なことに飛鳥の容姿はなのはに類似していた。つまりは――

容姿：女顔の美少年（認めたくないが……）

そう、親友のなのはは大変可愛らしい少女だ。そんななのはに瓜二つの顔立ちをしているという、後は語るまでもないだろう。

高町飛鳥は、絵に描いたかのような完璧な優等生であった。

恐らく、出会いさえ違えば、今とはまた違った関係を築き、違った感情を抱いたことだろう。しかし、いくら想像したところで現実が替わるわけではない。

今、アリサ・バニングスが抱く想い、それこそが全てだ。

「――――それではこの問題を……飛鳥君」
「はい」

教師の指名を受け、アイツが立ち上がる。なのはと同じクラスに在籍するため、二人だけは名前で呼ばれるのだ。
黒板に向かって歩く後姿を眺めながら、周囲の情報も同時に取り込む。女子の何人かは明らかに目の色が違っていることに否応なく気付かされ、再度溜息が零れる。
溜息を零す度に幸福が逃げるというが、果たして私は今日何度逃したのだろうか、考えたくもない。
スラスラと流暢な字で黒板に答えを書く飛鳥（アイツ）の背中をぼんやりと見つめながら、今後の対応をどうするか、頭を悩ます。
アリサ・バニングスの割と良く見かけるワンシーンだ。

◆　◇　◆　◇　◆

「――――それでは、今日はここまでにしましょうか」

その言葉と共に日直が号令をかかる。クラス一同、教師に頭を垂れ、礼をする。その後に待つのは、皆の大好きな昼食だ。皆、弁当を手に各々好きな場所で食事を取る。
この時、クラスには大小様々なグループが形成されており、大抵食事を取るメンバーは決まってくる。アリサの場合も例に漏れず、今日もまたすずかとなのはと一緒だ。
だが、何事も例外というものが存在する。

「おい飛鳥、こっちで一緒に食べようぜ」
「ちょっと待てよ、この前もそっちで食べたじゃないか。抜け駆けすんなよ」
「おいおい、こっちは休み前から言ってたんだぜ？　悪いが今日は譲れねぇな」

教室の一角で少年たちの何やら姦しいやら喧しい舌戦に、額に手を当て天井を仰ぐ飛鳥の姿が否応なく注目される。

「貴女の弟は相変わらずおモテのようね、なのは」

「あはは」

なのはの乾いた笑い声にアリサも流石に同情する。両手に花ならまだしも、男子では見栄えは決して良いとは言えないだろう。

高町飛鳥はその立場故か生来の性格故か、何処の勢力（グループ）に属そうともしない。孤高を気取る一匹狼、というわけでもなく、御呼ばれのあるグループからグループへと梯子している、所謂はぐれだ。

蝙蝠のようにも見えるが、むしろ実情は逆であり、皆が飛鳥（アイツ）を取り合っているのだ。万一彼が一つの勢力に加わろうものなら、周囲からブーイングの大合唱が起こるのは火を見るより明らかだ。

今日もまた調停役（バランサー）として職務を全うしていて何よりだが、こうも高頻度で言い争うのは如何なものか。

もう少し、上手くあやしなさいよね。

心中で無責任な言を吐くと、良い天気だから屋上でもとアリサは脳内で練っていた計画（プラン）を実行しようとするのだが――

「どうしたの、すずか」

「う、ううん。何かなアリサちゃん」

笑みを浮かべるすずかだが、声をかける瞬間までその視線が一人の少年を見つめていたことを、横目で目聡く捉えていたアリサは親友の手元に包まれた弁当を一瞬見つめる。

形状がいつもより若干大きく、親友（すずか）の僅かな動揺、トドメに指に巻かれた可愛らしい子猫がプリントされた絆創膏、送迎のバスでは終ぞ

はぐらかされたそれの意味を少女は知った。

さて、どうするか。

「だから今日は俺たちんところだって。昨日のサッカーはお前らのチームに飛鳥を貸してやったんだからいいだろ？」

「聞き捨てならねぇな。一昨日のバスケはそっちのチームだったじゃないか、そんな話を持ち出すならウチのほうが優先権を持ってると思うが」

「なら、間を取ってウチで飯を食うということで」

「「おいおい」」

男共（ガキ）の声に熱が徐々に篭っている、このまま放っておけばいつか臨界点を突破するだろうが、その点は全く心配していない。なんやかんやで飛鳥（アイツ）が上手く執り成すことのは明白だ。それぐらいの器量は持ち合わせている。別に信頼しているわけでもなく、ただ事実を述べただけだ。

むしろ、問題はこちら側だ。今、口を挟めば火に油を注ぐようなもの、火中の栗を拾う度胸はあれど、その後の対応を考えると気が重くなる。

しかし、すずかの意を汲むと願いを叶えてやりたいと思うのが人情というものだ。

アリサはメリットとデメリット、両者を天秤にかけ、シミュレーションを脳内で高速で何十通りと演算する。

「ねぇなのは、アンタ食事は何処で取りたい？」

「う～ん」

相変わらず天真爛漫な親友（なのは）のその姿に自然と顔が綻ぶ。

「やっぱりお天気も良いし、外で食べたいかな」

「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ（なら決まりね）」

その言葉が契機となる。軽く息を吐くと、アリサは小さく両手の拳を固め気合を入れる。

「良し、やるわよアリサ・バニングス」

「あ、あのアリサちゃん、一体何を？」

「まぁ黙って見てなさい、すずかの悪いようにはしないから」

妙な気合を入れるアリサに何かを察したすずかは慌てて制止の手を伸ばすが、虚しく空を切る。

金色（こんじき）の髪を掻き上げ優雅に歩むその姿は、まるで戦場に向かう戦乙女（ヴァルキューレ）のように美しく、力強い。

「アリサちゃん、なんか恰好良い……」

その後ろ姿に思わず見惚れる親友らを背に、アリサは教室を闊歩する。眼前には未だ低レベルの言い争いをする男たちの姿がある。

ただの女子では思わず気後れしそうな渦中に、少女は悠然と踏み込んだ。

「ちょっとアンタたち」

「げっ、バニングス」

思わぬ人物の登場に、言い争っていた男たちは思わず身を引く。

少年たちと少女の間に隔絶した身長の差異はなく、その目線は殆ど変らない。故に、彼らの目に少女がやけに大きく見えるのは、彼女が宿す瞳の力によるものかもしれない。

持って生まれた威光を携えた者特有の圧力に、少年たちは容易く呑まれる。

アリサは好奇と嫉妬に満ちた視線を黙って受ける。

「な、何だよ。今大事な話し合いをしてんだ。見て分からねぇのかよ」
尻込むことを恥じた少年の一人は、羞恥の感情を掻き消すように腹から声を出して威嚇する。しかし、そのような態度こそ、アリサからしたらお笑い種もいいところだ。
少女は態度を欠片も崩さず、気品を纏いながら舌という名の武器を取ると、躊躇することなく振り下ろす。
「お生憎様、いつまでも結論の出せない無意味な会話を『話し合い』というのなら、それを止めに来たの。周りを見なさい、皆迷惑しているのよ」
「何だと!?」
「バニングス、てめぇ……」
アリサの言葉に、男たちの瞳に明確な敵意が浮かび上がる。いくら子供でも既に一端の自尊心（プライド）を持っている。それを傷つけられて黙っている筈はない。
むしろ、大人と違い自制心が未だ形成しきれていない未熟な精神は容易に攻勢へと転じてしまう。
一触即発の事態に、教室内の空気が緊張で張り詰める。
反射的に、アリサの最も近くにいた少年の手が伸び、彼女の制服に触れようとした瞬間、突如現れた壁がそれを阻んだ。
遅いのよ。
態度はあくまで優雅に、内心で心臓を激しく脈動させるアリサは少年（ガキ）の手から庇ってくれた盾に心中で愚痴る。
「もう少し言い方というものがあるんじゃないかな、アリサ嬢」
「御免なさい、日本語って難しいわね」

白々しいその台詞に、周囲を囲む少年たちの顔から険が取れないが、先程のように手が出る、という雰囲気ではない。
一人の少年が少女と対峙するだけで、二人の間に何者も干渉できない不可侵領域が形成されていた。
クラスの男子の統率者(リーダー)が飛鳥ならば、女子の代表はこのアリサを置いて他にはいない。

「それで、要件は何かな?」

飛鳥の視線を間近に受け、胸の内で再度衝動染みた感情が湧き上がるが、理性でそれを捻じ伏せる。今は自身の感情より優先するべきことがある。
それを成すために、わざわざ足を運んだのだ。

「まさか、忘れたとは言わせないわよ」

合わせなさいよ。

「勿論覚えているよ、今日はアリサ嬢たちと一緒だって」

アリサの視線に込められた言葉に、飛鳥は間髪入れず応える。
飛鳥の言葉に一瞬、室内が揺れた。それは勿論錯覚の筈、だ。しかし、場を動かす威力を持っていたのは確かだったようだ。

「おいおい、本気(マジ)かよ」
「済まない、言おうとは思ったんだが」
「アンタたちが勝手に盛り上がってたから言うタイミングを逃したんでしょ」

バツが悪そうに顔を顰める飛鳥に、アリサがさり気なく援護(サポート)する。

「くっそ～、今日こそと思ったのによ～」
「悪い。この埋め合わせは今度するから」
「じゃあ、今日の放課後だけど」
「それは帰ってきたら教えてくれるか、勿論どのメンバーとでも付き合うからさ」

その言葉にグループのリーダー格たちは仕方ないと未練を何とか断ち切る。

「了解、じゃあさっさと行っちまえ！」
「この男の敵め！」
「あぁ、済まないが失礼するよ」

少年たちの野次を背に、飛鳥はアリサを伴って歩き出す。周囲を見守っていた観衆もエンドロールを見る気はないようで、各々話を咲かせ始める。

「……助かった」
「別に、アンタのためじゃないわよ」

ポツリと呟かれた飛鳥の感謝の言葉を、アリサは拒絶する。
そう、本当に飛鳥（コイツ）のためにしたわけではない。あくまで、すずかのためだ。
しかし、今回もまた大立ち回りをしてしまった。これで、最近ようやく沈静しつつあった火種に火をくべてしまった。

「またバニングスさんのところでだってさ」
「いいわよね～高町さんがいるから誘いたい放題じゃない」

アリサは心中で深く重い息を吐く。そう、男子以上に女子の妬みは

始末に負えない。彼らのように単純に、容易く表面化しないため、表向きはあくまで穏やかだ。されど、その裏でどのような怨嗟を吐いていることやら、想像するだけで気が滅入る。

また、一からやり直しね。

事後処理に追われるのは上に立つ者の責務だ。そう思わないと、正直やってられない。神経質（ナーバス）に陥りそうになる精神を持ち前の根性で無理やり持ち直す。

折角悪役を演じてまでもぎ取った景品だ、有効活用しなければ損というものだ。

空は青く、風も穏やかだ。春の日差しの上で食べるランチはまた格別に美味しい筈だ。

アリサ・バニングスは歩き出す、高町飛鳥（トラブルメイカー）と共に。

「この貸しは高いわよ、覚悟なさい」

「お手柔らかに」

第三話　あなたの心なんて丸裸も同然よ

「花も恥らう乙女に向かって悪魔って……アンタ、どういう神経しているわけ？」

元来、ぱっちりとしていた筈の親友の目は完全に据わっており、その唇から飛び出すのは明らかな侮蔑の言葉。その中に挑発の意図が含まれているのは明白だ。

同い年の、しかも異性からの先の言葉。普通なら簡単に釣れるだろうその針に、彼（えもの）は釣られない。

「こういう神経をしているよ」

「コ、コイツ……」

「アリサちゃん、お、落ち着いて」

アリサの辛辣な視線など柳に風、洗練された動きで彼はおかずを口の中へと運んでいる。その姿に思わず頬が緩む。

いつもと変わらぬ日常に心が安らいでいるのは勿論ある。されど今胸の中で生れる僅かな痛みすら感じるこの幸福感は、それ以外の要因が加味されていることを少女は確かに自覚していた。

吹き抜ける東風（こち）が心地良く、靡く髪を軽く押さえながら少女は改めて自身を囲む親友たちの顔を見つめる。

「何言ってるのなのは、言われた本人がそれじゃいつまで経ってもコイツに舐められたままよ。それでもいいの!?」

目くじらを立て、一人でヒートアップしているのはアリサ・バニングス。少女の親友の一人だ。

異国の血を引く彼女の容姿は一際人の目を惹く。髪染めではない、純粋な血によって発現する黄金の髪は彼女の快活な精神を良く現し

ていた。
今は怒りに曇る彼女の瞳だが、その藍緑色(アクアマリン)の輝きは勇敢の石言葉を持つ。名は体を現すと言うが、彼女は正にその体現者と言える。
アリサとの出会いは少女にとって最悪と言えるものだった、だが今の時間を加味すれば帳消しに出来るどころかお釣りが来る。
それほどまでに、少女にとってアリサとの出会いが世界(すべて)を変えていった。

「だ、だって飛鳥が私をからかうのは日常茶飯事だし……」

そして、最悪の出会いを最高の出会いに変えてくれた少女のもう一人の親友、高町なのは。
天真爛漫に服を着せたらなのはだ、とはある少年の言葉だが言いえて妙だ。穏やかで優しく、そして何より正義に篤い女の子。
なのはにその善性がなければ、アリサとの関係は今とは真逆のものとなっていた。これは少女の想像ではなく確信だ。
今こそアリサの剣幕にたじたじのなのはだが、あの時はとにかく凄かった。その心の強さに、憧れさえ抱いた。その想いは未だ胸の中で確かに息衝いている。

親友と、胸を張って言える確かな友を得られる生を謳歌できるとは夢にも思わなかった。そして、それがどれだけ幸福なことか、少女は知らなかった。
孤独(あのころ)の私はもういない。この温もりを知ってしまえば、もう戻れない。
昔を思い出し、少女は体を一瞬震わせる。過去の残滓ですら、この寒さだ。もし目の前の親友達が己から離れれば、心が凍て付いてしまうかもしれない。
その可能性を有り得ないと、少女は断言できない、出来る筈がない。
少女には親友にすら打ち明けられないある秘密を抱えていた。それを知られることは少女にとって恐怖以外の何物でもない。

何故ならば、それを知られることはこの日常の終焉に他ならない。そう少女は信じて疑わない。それほどまで思いつめてしまうほど、少女が抱える秘密は大きく、重い。

だからそれをひた隠し、少女は笑う。親友を欺く痛み(罪)を抱えて。

彼女たちと離れないために、放さないために。

そして、それは彼女達だけではない。

「なのは、それは違う。からかっているんじゃない、可愛がっているんだ」

「にゃ、や、やめてよ〜」

無造作に撫でられなのはの頭がゆらゆらと揺れる。嫌がった素振りを見せているが、その顔に浮かぶ表情は言葉を裏切っていた。

恥じらうなのはの隣に座り、彼女へ温かな眼差しを向ける少年に、少女の鼓動が小さく跳ねる。

少年、そう言葉にすることを躊躇ってしまう程、その容姿は少女が認識している男(いせい)とかけ離れている。

未だ第二次性徴期を迎えていないとはいえ、男女の骨格の差異が徐々に顕になっている。少女の記憶が正しければ、もう少し男の子の体はがっしりとしていた筈だ。

けれど、正面に座る少年は違う。着ている制服は確かに男子用のものだが、線は女の子のように細く、服の間から覗く四肢は男子とは思えないほど白くしなやかであり、顔の輪郭も理想的な曲線を描いており、一目で男とは到底見抜けない。何せ、親友(なのは)と瓜二つの顔立ちだ。

男装した女の子、それが少年を表すに相応しい。

だがその内面、性格はその女性的な外見とは相反しており、確かにその心は男であると理解する。

それを補強するかのように、少年の手にはその容姿に似つかわさぬ弁当箱が鎮座している。その大きさはなのはのおよそ二倍、自分たちの弁当箱の二回りは大きいだろうそれを、いとも容易く完食してしまう少年の胃袋の大きさに、やはり男の子だと意識させられる。

とくん、と心臓が少女の体を小突く。少女は反射的に視線を膝の上へと向ける。
彼は敏い。さり気なく見つめていたつもりだが、気付けば彼の穏やかな瞳が己を映していた。まるで自分の全てを見透かされるようで、僅かな恐怖すら覚える。
しかし、その感情は更なる大きな感情に塗り潰される。その感情の名を少女は知ろうとはしない、知れば必ず傷つくと、彼女の本能が理解していた。
それでも少女は、欲していた。

「そうやって誤魔化すのはよくないと思うな」
「すずかさん……」
「そういう人にはもうおかず分けてあげないよ?」
「私が悪う御座いました」

この一時(ひととき)が、永遠であればいいのに。

高町飛鳥は夢をみる　第三話　～あなたの心なんて丸裸も同然よ～

「また、この刻(とき)が来てしまった……」
乾いた大地はまるで現代の人の心のように荒んでおり、春風に吹かれ砂が無情に舞う。少女はこの世の無情に嘆き、その表情には愁いが満ちる。
「たかだか体育の授業で大げさよ、なのは」

「私にとっては深刻な事態なの！」

先程の空気は何処へ吹いたのか、頬を膨らませ抗議するなのはとそれを生暖かい目で見守るアリサ、これも毎度恒例の光景だ。

「体を動かすのは気持ちいいことだと思うけどな」

「それは運動が出来る人限定です」

なのはの僻みの混じった視線にすずかは苦笑を浮かべる。彼女の運動能力は知っている。基礎体力は当然のことながら女子の平均を下回っており、敏捷性や反射神経など思わず目を覆いたくなる性能を誇る。

はっきり言って、高町なのはという少女は典型的な運動オンチである。

「何事も訓練よ、なのは。確か今日はドッジボールだったかしら」

「Ｒｅａｌｌｙ（ほんとに）？」

「あらなのは、なかなか良い発音じゃない」

アリサの褒め言葉などまるで聞いておらず、なのははまるでとあるノルウェー画家が描いた油彩絵画の人物のような表情を浮かべる。絶望に文字通り座り込む親友（なのは）の情けない姿に、思わずアリサに視線を寄越すと、酷く冷めた表情で首を左右へと振る。

「なのはちゃん、頑張って逃げようね」

当てようね、とは口が裂けても言えない。なのはの身体能力ではまともなパスを投げられるかすら怪しい力量（ライン）にある。

それならば、下手に攻撃に出ず大人しく逃げ回っていた方が自他共に良いだろう。

「すずかちゃん、敵になったら優しくしてね」
「何始まる前から情けないこと言ってるのよ」
「だ、だって～」

アリサの叱責になのはは何とか言い訳を絞り出そうとしているが、残念ながら頭の回転はアリサの方が一枚上手だ。このまま放置していれば、試合が始まる前からなのはが撃沈するのは目に見えている。
助け舟を出すのはもうすずかの習性と化していた。

「ほら、いざとなったら最初から外野にいればいいじゃない。それなら当たる心配はないでしょ？」
「私、頑張って外野やる！」
「何と現金な娘」

反転、後ろ向きに全力で取り組む姿勢を見せるなのはにアリサは思わず顔を手で覆う。何とかやる気を出したので良しとすべきだろう。
すずかはそう、自分を納得させた。彼女にだってやれることには限度があるのだ。
だが、そんな彼女の努力を嘲笑うように、アリサは小悪魔の笑みを浮かべる。

「でもすんなりなのはにやらせて貰えるかしら」
「アリサちゃん……」

分かっている筈の親友に無言の抗議を主張してみるが、どうやら取り合う気はないらしい。意気込んでいるなのはの肩に手を置くと、もう片方の手である人物を指差す。
すずかも釣られ、視線を向けるとそこにはクラスのリーダー格の男子たちが何やら話し合っていた。そして、その中に飛鳥もいた。

「ドッジボールの基本は外野と内野の素早いパスワークによる敵の攪

乱、そして統率の崩れた一角から各個撃破、この流れに尽きるわ。そして基本的にチームを仕切るのは男子、後は言わなくても分かるわね、なのは」
「うぅ……」

確かに学級（クラス）を統率するのは女であるアリサにも出来る。けれど、こと体育に関しては勝手が違う。優れた運動資質が集団（チーム）を仕切る最低限の要素だが、アリサも運動が決して出来ない部類ではないが、男子相手には分が悪い。

これが男女別のチームなら何の問題もないのだが、残念ながら体育の授業は男女混合で行われている。そうなると主導権は必然的に男子へと渡ってしまう。そのため、姉御肌のアリサがこうして静かに話の推移を渋々待つという構図が出来上がる。

だが、何事にも例外というものが存在する。

「まぁ、すずかが一言進言すればなのはが外野に行ける可能性は上がるわね」

１％くらいわね、というアリサの幻聴をすずかは確かに聞いた。なのはの藁にも縋りそうに表情にすずかは途方に暮れる。自身にそんな発言力があるとは思えないが、体育において通常と立場が異なることには少女も気付いていた。

「なのはちゃん、そんな目で見ても駄目だよ」
「そ、そこを何とか……」

なのはに縋り付かれ途方に暮れるすずかだったが、突如彼女の体が身構える。肉体の突然の反射反応に少女の理性が、その志向性をその原因へと向ける。するとその先にはお荷物（なのは）の弟が、あろうことかこちらに向かって歩いているではないか。

気付けばすずかは臨戦態勢を整える。それは即ち、静かに、御淑や

かに、何処に出しても恥ずかしくない一人前の淑女(レディー)へと。
月村すずかは猫を被る。

「どうかしたの、飛鳥君？」
「いや、うちの愚姉が迷惑をかけているようなので。本当に毎度毎度申し訳ない」
「そ、そんなことないよ」

深々と頭を下げる飛鳥に面喰い、意味もなく手を振って彼の言葉を否定する。

「どうかこんな姉ですが、見捨てないでやって下さい。お願いします」
「誰がこんな姉だ～」

飛鳥の言葉に即座に反論するなのはだが、その姿に姉の威厳など微塵もない。自分と忍(あね)との関係とはまるで違う、けれど同種の温かさを感じる。
その熱がすずかの心を満たす。

「そう言われたくなければさっさとすずかさんから退かないか、みっともない」
「こればかりはコイツに同意するわ」
「うぅ～すずかちゃん、皆が私を苛めるよ～」

飛鳥の言葉に追随したアリサの呆れた視線に、なのはは更にすずかに身を寄せる。その姿はまるで家で飼っている猫のようだ。
反射的に喉元を撫でようとする己の手を慌てて止めると、不自然のないようそのままなのはの頭に手を乗せる。

「大丈夫だよなのはちゃん、私が守ってあげるから」
「すずかちゃん！」

歓喜極まるとは正にこのことか、と言わんばかりの満面の笑みを浮かべ抱きつくなのはに、飛鳥もアリサも、もはや何も語ることはなかった。

「でも敵になった時は別だから」

「そんな～」

◆　◇　◆　◇　◆

一人削り、一人削られ、ボールがコートを行き交う度に双方の内野の人口密度は薄くなり、その分布もまた点在したものとなる。

飛び交うのは何もボールだけではない、喜怒哀楽の声が校庭に高らかに響き渡る。

「喰らえー！」

助走をつけて放たれたボールの速度は女子では到底出せない程早い。女子はおろか並の男子ですら迫るそのボールの威圧感に思わず目を瞑ってしまうかもしれない、そう思わせるほどの速球をすずかはいとも容易く捕球してみせる。

「流石、月村さん！」

「いけいけ～！」

「あと少しよ！」

チームメイトから歓声が湧き上がる。すずかにとって何でもない動作も、彼女らの視点ではそれ全てが一流選手（トッププレイヤー）の妙技に見えるらしい。

「はは、ありがとうすずかちゃん」

「約束したからね」

すずかの背に隠れる少女、なのはの礼の言葉に少女は小さな微笑を浮かべる。

試合開始直後はいつもの乱闘ならぬ乱投戦に突入する。人が密集しているため、かえって動きが抑制されるために取り零したボールが他のプレイヤーに触れる、所謂ダブルアウトがかなりの割合で発生し、双方順調に内野の人数を削っていく。

すずかはこの時間帯は敢えて足を止める。即ち回避運動を最初から捨て、捕球に意識を集中することにより、イレギュラーのバウンドにすら対応してみせる。

すずかは線こそ細いものの、その精神は決して細くはない。

運動オンチで知られるなのはをすずかは先の約束通り庇い続けた。彼女がいなければなのはなど速攻で落とされていたことだろう。どうやら、なのはの当初の望みは叶わなかったらしい。

程良い空間が確保できるようになってからは、双方の有力な生徒達の投手戦となる。互いが互いの隙を窺いチャンスと見るや、すかさず投げ放つ。

既に内野に残っているのはすずかとなのはを除けば僅か三人、いずれも運動神経に優れた男子だ。対する相手チームの残りは僅か男子二名。一人を倒せばチェックが入る。しかも、ボールはすずかの手の中にある。

圧倒的優勢、既に勝利までの道程がはっきりと見えていた。けれど、すずかは慢心しない。

精神は高揚せず、むしろ何処までも静かに張り詰める。まるで矢を番(つが)える射手のように。

刹那、空気が震えた。

強弓より放たれた一陣の風は一瞬にして相手を射抜く。

一瞬の静寂、そして更なる歓声と激励の言葉が四方から湧き上がる。

「あと一人！　あと一人！」

――――違う。

すずかは独り、その言葉を否定する。確かに、眼前の内野に佇むのはただ一人だけだ。けれど、まだ一人ではないのだ。

「タイム！」

背後から聞き覚えのある少女の声が上がる。振り返ればそこには不敵な笑みを浮かべた親友（アリサ）の姿があった。

敢え無く別々のチームとなってしまったアリサは、試合当初は乱投戦に参戦し何人か当てたのだが、外野から放たれたボールに、周囲の生徒によって回避運動が制限されヒット、外野へと回された。その後一度、敵を撃ち落して内野に舞い戻ったのだが、すぐさま狙い撃たれ外野へとんぼ返りするハメになり、先程までご立腹な態度で試合を見守っていた。

その親友が動いたのだ、不敵な笑みを携えて。

「先生、『復帰（バック）』を宣言します。いいですよね？」

復帰（バック）、即ちゲーム開始から場外にいる者が、内野の一人がボールを当てられた場合に一度だけ交代で内野へ入れるという公式規則（ルール）が存在する。

この試合も特別なルール変更は存在せず、つまりは規定のルールは勿論適用される。

「許可します。それではバニングスさん、内野へ」

審判を務める教師の誘導の言葉に、されどアリサは首を横へと振る。

「御免なさい。先生、復帰するのは私じゃないんです」
「それは構いませんが、では誰が……」

その言葉にアリサの視線が、いや彼女だけではない。気付けば、極自然に全ての生徒の視線が一ある点に集束されていた。
そして、その人物をすずかは良く知っていた。

「そういうわけだから、頑張んなさい」

気軽に肩を叩かれたその生徒は周囲を見渡し、そして苦笑を浮かべる。再度、校庭に熱狂の渦が沸き上がる。

「分かりました。それでは飛鳥(あすか)さん、内野へ」
「分かりました」

教師に促され、飛鳥は内野へと歩を進ませる。多くの観衆の視線に晒されながらあくまで変わらぬ彼の歩調は、それだけで確かな力強さを感じさせた。
味方の期待を一身に背負い、高町飛鳥は最前線に踏み込む。

「そういや飛鳥、最初から外だったんだ」
「そうね」

そう、なのはの弟、飛鳥は試合開始時から既に外野に回っていたのだ。しかも、試合中は相手を狙わず、パスに徹しておりその活躍は華々しいものではなく、むしろ地味な役回りを自分に課していた。
だが、彼のパスは非常に巧い具合に戦列を分断し、各個撃破の局面を幾つも作り出していた。今回のチーム編成だと、明らかすずかたちに分があった。しかし、蓋を開ければほぼ互角の勝負を繰り広げていた。その要因を知る者は少ない。

そして、すずかはその数少ない少数派の一人であった。

「頼もしい援軍のご到着だ」

「あんまりプレッシャーをかけるなよ」

コツンと、拳を合わせる飛鳥たちのやり取りに一部の女子生徒から熱い声援が上がる。すずかは手強い強敵の戦線復帰に身構えながら、その口元には本人も気付かぬうちに緩やかな弧が描かれていた。

「あの、すずかちゃん？」

「何、なのはちゃん」

「な、なんでもないです」

急に押し黙るなのはに疑問を抱くが、それも眼前に立ちはだかる好敵手を前に霧散する。すずかの腰が自然に落ち、重心が据わる。その姿はさながら獲物を前にした黒豹（パンサー）のようだ。その彼女らしからぬ獰猛な眼光に、飛鳥の隣に立つ少年は思わず一歩後ずさる。

しかし、飛鳥（あすか）の瞳に畏怖の色はまるでない。それが分かるから、その恐怖を誰より知るからこそ、それを恐れぬ少年にすずかは惹かれる。

少年からボールを受け取った飛鳥は僅かな助走の後、腕を振り上げる。

その投球姿勢（スローポジション）から腕が鞭のようにしなり、更に手首を返し指先からボールが離れる。その一連の芸術のような投球によって放たれたボールが奏でる球音は空気を巻き込み、激しく音を掻き立てる。

すずかが投げる相手を撃ち落とす剛速球とは対極の、捕球崩し（ファンブル）を狙った絡み球が飛鳥より放たれる。

そのボールを待ち受けるのは一人の少女だ。

両手でボールを包んだ瞬間、掌から伝わる衝撃に意識するより先に体が反応する。このままでは取り零すと、懐に抱き包み込む。

まるで家に来たばかりの捨て猫たちを思い出しながら、すずかは暴

れ狂うボールを受け止める。

「ふふっ、なかなか強情だったかな」

胸の中で大人しくなった球を掲げ、可愛らしく微笑むすずかの姿に生徒たちの熱気（ボルテージ）が際限なく上昇させられる。

「なのはちゃん、御免ちょっとだけ離れてくれる？」

「う、うん」

なのはがここで初めてすずかから離れる。それは即ち、すずかが本気を出すということだ。彼女の身体能力は女子の平均レベルを容易く超え、同じ男子たちですら悠々と超える。

つまり、月村すずかは学年でトップクラスの身体能力を有していることを意味する。

その本気がどれほどのものか。クラスの視線がすずかに集束するのは当然の帰結といえる。

普段なら間違いなく気になる筈の視線も、今はまるで気にならない。ただ、眼前の少年に自分のチカラを揮えることに気分が否応なく高揚する。

駆け出すと彼の輪郭が相対的に大きく、確かなものへと変わっていく。ただ、それだけで頬が熱くなるのか少女にはまだ分からない。けれどその心は何処までも軽やかだ。

自陣と敵陣を分かつ境界線ギリギリまで近づくとすずかは大地を強く踏み締め、上体を逸らす。その姿はまるで限界まで弓引かれた矢を髣髴させる。

止めなさい、と理性が警鐘を鳴らす。しかしその声は余りに小さく、血の衝動に酔うすずかの耳には届かない。

「いくよ！」

すずかは腕を振り下ろす。そこに技術は存在せず、どこまでも直情的な投球であった。だが、だからこそそのボールの速度は凄まじいの一言に尽きる。

小細工など一切ない、する必要性すら感じられない純粋な威力勝負（パワーファイト）。

子供一人、容易く吹き飛ばす威力を秘めているのは一目見て誰もが理解できるだろう。

それを、飛鳥は黙って受け止める。

彼と球が接触した瞬間、何処までも鈍く重い音が校庭に響き渡る。その衝撃音に思わず誰もが目を瞑ってしまう。その一瞬、結果が暗闇に閉ざされる。

アウトか、それともセーフか。

慌てて目を見開きその結末に目を凝らすと、そこには――

「ちょっと情熱的過ぎませんか、すずかさん」

何処までも普段と変わらぬ飛鳥（あすか）の姿がそこにはあった。

◆　◇　◆　◇　◆

「それで結局どうなったのかしら？」

「え～とね、負けちゃったんだけど」

「へぇ～すずかがね～って、だけど？」

目を瞬かす姉にすずかはその時の情景を思い返しながら、言葉を繋げる。

「うん、あの後飛鳥君と一騎打ちというか、交互に投げ合ってたんだけど最後は私がボールを落としちゃってアウトになったんだけど、そこ

で鐘が鳴っちゃって試合終了。人数は私たちのチームが内野に三人残ってて、飛鳥君のチームは二人だったから、試合は私たちの勝ちで終わったんだ」
「ふ～ん、何か釈然としない結末ね」
当事者でもないのに不満そうに眉を顰める忍の姿が親友（アリサ）の姿とそっくりで、すずかは小さな笑い声を上げる。
「勝負に負けて試合に勝った、ということですね」
物音一つ立てず、まるで初めから居たかのようにメイド服に身を包んだ妙齢の女性が食卓にトレーを置く。
「みたいね、お茶ありがとうノエル」
「いえ、すずか様もどうぞ」
「ありがとう」
メイド長（ノエル）から手渡された陶磁器から漂う甘美な香りにすずかの表情が緩む。
「それにしても嬉しそうね、すずか」
「……そうかな？」
「そうよ、何なら鏡を持ってきてもらおうかしら」
「いいよ、そんなことしなくて」
姉の明らかなからかい顔にすずかは顔を背ける。なのはの苦労話はすずかにとっても他人事ではないのだ。この気苦労は一人っ子のアリサには分からないだろう。
しかしどうにも、先程から姉の視線が気にかかる。何というか、待ちに待った玩具を手にした子供のようというか、ねこじゃらしを前にした猫のようというか。

弄りたくてしょうがない、と顔にでかでかと書かれている。どうやら早めに部屋に撤退したほうが良さそうだ。
この時、すずかは判断を誤った。早めと言わず即座に戻るべきだった。しかし、時は無情にＩｆ(かのうせい)を押し流す。

「やっぱりあれかしら、その絆創膏のせい、だったり？」
「お、お姉ちゃん!?」
「やっぱりね～」

うんうんと一人納得顔の忍(あね)をすずかは凝視する。その頬は羞恥の色に鮮やかに染まっていた。

「何故分かったのかって顔してるわよ、すずか。甘い甘い、恭也とイチャイチャすること早……何年？　まぁそんな細かいことは今はいいの。兎に角、この今の私の恋愛力を持ってすればあなたの心なんて丸裸も同然よ！」
「お嬢様、言い方が少々卑猥です」

親指を立て何故か勝ち誇る姉の姿に、すずかの頭に鈍痛が走る。

「ノエル、ツッコミは後にして頂戴。今は愛しい妹(すずか)の助言(カウンセラー)が先よ」
「……少しは自重するようにお願いします」
「まっかせなさい！」

その口から放たれた言葉とは裏腹に忍の顔には、それはもう素敵な笑みが張り付いていた。

「さてすずか、その左手の薬指に巻かれる絆創膏はどうしたのかしら。確か、今朝貼ってあったのは仔猫が印刷(プリント)されていたわよね。今つけているのは、おやおや～何もないわね、これはどうしたのかしら？」
「そ、それはあの試合の時に絆創膏が切れちゃって、ボールを受けてた

ら昨日の切り傷が開いちゃって、それに気付いた飛鳥君が替わりにこの絆創膏を……ってお姉ちゃん、その顔止めて！」
「えぇ～どんな顔かな～忍ちゃんわっかんな～い」

姉のその態度に、その声に、少女の中で何かが切れる音がした。

「お姉ちゃん！」
「おっ久々の姉妹喧嘩ね、買ったわ！」
「失礼しますって何ですか、これ!?」
「ただのスキンシップです。ファリン、食器を片しますよ」
「は、はい」

超人的な肉弾戦が繰り広げられる最中、二人のメイドは黙々と己の任務をこなす。
その夜、月村邸から騒音が鳴り止むことは終ぞなかったという。

「お姉ちゃんの、馬鹿ぁぁーーーーっ!!」

第四話　この世は無情だね

人間、普段と違う行動を行う際には、大小あれど緊張感を抱くものだ。これは、自身の経験にない未知の状態下に対する不安や警戒といった精神の不均衡化が原因である。

それを取り除くためには不確定の状況に対する免疫、つまりは場慣れが必要不可欠なのだが、高町家の末女、なのはにはまだまだその場数が圧倒的に不足していた。

「そういうわけで、その、えぇっと……」

向けられる視線に胸が痛い。悪事など何一つ働いていないのに、まるで針の筵（むしろ）に座るかのような居心地の悪さは何だろう。口の中にはいつまでも言葉が留まり、舌の上で溶けることなく転がり続ける。

話の筋道はきちんと通っている、筈。ならば自分が言わんとしていることは皆、理解しているだろう。しかし、誰もが己の言葉を引き継いではくれない。

自分の言葉を、高町なのはの言葉を待っているのだ。

息を深く吸い込みゆっくりと、不安を混ぜ込みながら吐き出す。未だ脈拍は高域を維持し続けていたが、覚悟は決まった。

少女は意を決し、重い唇を抉じ開け、肺腑を震わせ、そして告げる。

「そのフェ「なのは、早くしないと料理が冷めるぞ」……」

長い時間をかけて固めた覚悟は急速にその力を衰えさせていく。と同時に、何かが体の奥底から沸々と沸き上がってきた。その熱量の正体を少女は良く知っていた。

それは怒りだ。

自然に眉が釣り上がり、少女の瞳には義憤の炎が灯る。

「もう飛鳥、なのはが言おうとしていたのに茶々を入れるのは良くないよ」

文句を言おうとするより先に隣から小言が飛び出す。なのはの姉にして高町家の長女、美由希だ。眼鏡の奥から、非難の視線が放たれる。

しかし、問題の人物はまるで意に介しない。

「姉さん、そうは言ってもこのままでは折角の料理が冷めてしまう、と愚弟は進言します」

トレーから配られる皿から香ばしい香りと湯気が立ち昇る。給仕人（ウェイター）のその言葉（みず）になのはの怒（ほのお）りが急速に萎んでいく。

彼の言うとおり、いつまでも待たせては母がわざわざ出来立てを用意してくれたのに、その厚意を無碍にしてしまう。何処までも純粋な少女にはそれは、余りに罪な行為であった。

「だとしても、もう少し間を見計らっても良いだろう」

「お兄ちゃん……」

美由希（あね）の隣に座る兄、恭也の意外な擁護になのはの胸に熱が戻る。飛鳥（おとうと）と共に自分をからかうことが多い兄だが、こうしてたまに庇ってもくれるものだから、嫌いになれない。

そもそも極度のお人好しであるなのはに人を嫌うなど到底無理な所業だが、肝心の当人はまるでその自覚がない。

「そうだぞ飛鳥。むしろあの瞬間（タイミング）を狙っていただろう」

「さて、なんのことでしょうか。生憎、私には覚えがありません」

疑問ではなく確信を得ている父、士郎の視線は明らかに弟を咎めている。問題があるとすれば、一家の大黒柱の眼光にすら全く萎縮せ

ず、どこぞの悪徳政治家の台詞を吐く少年の存在だろう。

「もう、飛鳥は少しは黙っててよ！」
「そうそう、もう少しだけ黙ってようね」
「そうだな」

頬を膨らませるなのはに兄と姉が援護に回り、父も黙って頷く。見事なまでの一方展開（ワンサイドゲーム）だ。

「何という四面楚歌、この世には神も仏もいないのか……」
「そうやってなのはをからかうのは止めなさい、飛鳥。いくらなのはが可愛いからって悪戯ばかりしてはそのうち本当に嫌われるわよ？」

黄昏る飛鳥（おとうと）にトドメを差したのは四面の最後の一角、高町家の要であるなのはの母、桃子の言葉だ。何処までも柔らかく、しかし確かな叱責を含ませたその言葉に、流石の問題児も折れた。

「それは困りますね」

肩を竦めるその姿は何処までもふてぶてしく、されどその瞳には何処までも家族への親愛の情に溢れていた。

「悪かったよ、なのは」
「うん、分かればいいの」

飛鳥の言葉をなのはは素直に受け取る。つい先程まで、あれほど不安定だった心はまるで嘘のように穏やかであり、その心はまるで小波一つない大海のようだ。
その姉弟のやりとりを士郎たちは静かに見守る。彼らの目は何処までも穏やかだ。

「飛鳥、手伝いありがとう。私達も座りましょうか」
「えぇ」

給仕を終えた飛鳥と桃子は自分の席へと腰を下ろす。一家全員、食卓に揃ったことで、再び視線がなのはへと集う。
されど、少女が臆することはない。

「じゃあなのは、早く続きを言ってくれよ」
「うん、あのね――」

飛鳥の言葉に誘われるようになのはは告げる。何処までも軽やかな心と共に。

高町飛鳥は夢をみる　第四話　～この世は無情だね～

「今日のすずかちゃん、凄かったね」
「そんなことないよ」
「後はアイツにトドメを刺せれば完璧だったのに！　惜しいことをしたわね、すずか」
「アリサちゃん……」

親友の少々物騒な発言に苦笑しながら、学生の本分たる学業を終えたなのはたちはとある目的地へと向かっていた。

「すずかは悔しくないの、アイツに負けたのよ!?」
「アリサちゃんほどじゃないかな、結構良い勝負出来たからそれだけで満足だよ」

髪を掻き乱すほど悔しがるアリサに負けたすずかが宥めると言った何とも奇妙な状況に、なのはは小さく溜息を零す。
アリサの負けん気が人一倍強いのは長年通して嫌というほど痛感しているが、こと飛鳥に対してその度合いは桁違いの一言に尽きる。その倍率は脅威の三倍強、このまま行けばいずれ天元突破しそうな勢いだ。
その理由は大よそ見当がつくが、どうにかならないだろうか。

「ならないだろうな～」
「何がよ？」
「ううん、何でもないよ。そういえばすずかちゃん、指大丈夫？」

なのはの言葉に釣られ、アリサの視線もまたすずかの指へと向けられる。スラリと伸びた五指の内の一つに、その指に似合わぬ指輪が納まっていた。
その指輪には装飾の類は一切なく、ただ装着者の身体の保護のみが求められる。

「大丈夫だよ、ちょっと血が出ちゃっただけだから。心配させてごめんね、なのはちゃん」
「ううん、むしろウチの弟が怪我させちゃって本当にごめんね」
「そんな、気にしないで。それに飛鳥君は何も悪くないよ、私が――」
「はいストップ、無限ループに入るからそこまで～」

互いに頭を下げ合う両者の間に入って手で制するアリサに一同が沈黙し、そして笑い合う。

「でも意外よね、アイツが絆創膏なんて気の利くものを持ってるなんて」
「そうかな、飛鳥君って色々と気が利くと思うけどな」

絆創膏を巻かれた指を見つめながら、すずかは本来の所持者を脳裏に思い浮かべる。その唇に優雅な曲線が描かれていることに少女はまるで気付いておらず、その様子をアリサは意に満たない様子で眺めていたが、ふと視線を隣のなのはへと向ける。

「なのははどう思う？」

「う～ん……剣の練習とかで結構怪我とかしているから、万が一の時のために持ってたんじゃないかな」

一見、女の子にしか見えない飛鳥（おとうと）だが、その体には実は結構な傷の痕が残っている。といっても、傷痕など至近距離で見ないとまず分からない程度に薄いため、一目見ただけでは染み一つない体にしか見えない。

「そういやアイツ、剣道……いえ剣術だったかしら。習っているのよね？」

「うん、御神流って言うんだって、私もあんまり詳しいことは知らないんだ」

弟が怪我をする九割以上の原因は鍛錬によるものだ。士郎（ちち）や恭也（あに）も大小様々な傷を抱えて生きている。どうやら高町家の男系は傷とは切っても切れない縁らしい。

不思議なことに美由希（あね）にはそういった傷とは無縁な体をしている。おそらく兄（しはんだい）が気を使っているのだろう、割と古風な人だから「嫁入り前の娘に傷痕など残せるか」などと考えているかもしれない。

傷は男の勲章というが、なのはからすれば痛々しくて傷痕など、ないに越したことはないと思うのが正直な気持ちだ。

特に飛鳥は自身と殆ど変わらぬ容姿をしているだけに、まるで自分が怪我ばかりしているようで余り良い気分はしない。だが、かと言って怪我をするなと無茶な要求をするほど、なのはも子供ではないつも

りだ。

「ふ～ん、でアイツ強いの？」

「どうだろう……いつもお兄ちゃんとお姉ちゃんにコテンパンにやられてるから、そんなに強くないんじゃないかな？」

「そっかそっか……アイツ、そんなに負けてるの？」

思い返してみるが、今日に至るまで飛鳥が兄達に勝った光景など一つとして存在しない。つまりは全敗だ。

飛鳥が御神流を修める期間は、先人（きょうや）たちに比べ圧倒的に短い。同じ質の鍛錬を行っているのだ、その差が時間と比例するのは極めて当然といえる。それを縮めるには当人にはどうしようもない持って生れた資質、即ち才能が必要なのだが、残念ながら飛鳥の剣の才は天賦のものではないようだ。

「アリサちゃん、その顔止めた方がいいよ？」

「おっと、天下無敵のアリサちゃんがとんだ失態を犯してしまったわ。我ながら詰めが甘いわね」

仇敵の弱みの一つを握った、と言わんばかりに会心の笑みを浮かべるアリサに、すずかはが即座に戒める。それが親友のためなのか、はたまた弟のためなのか、なのはにはまるで分からなかった。

「大丈夫よ、私がその程度で満足するわけないでしょ。今度こそ、アイツを倒してみせるわ！」

アリサは拳を握り締め、改めて自身に誓約する。

武力で飛鳥を退けるほど、少女に武術の才もなければ覚悟もない。彼女が自身の力で打倒することが出来るのは文武の、文だ。

「でもアリサちゃんと飛鳥はいつもテストで百点満点なんだから、勝

負なんてつかないと思うけどな」
「なのはちゃん、余計なことを言わないの」
口から思わず零れた本音をすずかが小声で忠告する。
「そうよ、今日も頑張って勉強して今度こそアイツを負かしてやるのよ。ほらなのは、すずか、さっさと塾に行くわよ！」
「「は～い」」
幸いなことに、なのはの言葉は自分の世界に浸っていた学年主席の耳には届いていないようで、妙なやる気を出したアリサは塾に向かって先陣を切る。
闊歩する親友の背を眺めながら、なのははこの場には居ない半身を想う。

今年に入ってからアリサとすずかと共に同じ塾に通うことになった。その理由は己の学力に対する不安によるものではなく、二人から誘われたのがきっかけだ。
その案を両親は快諾、晴れて親友達と同じ塾に通えることになった。この件は当然、飛鳥も含まれていたのだが、当人の希望で弟は塾には通っていない。
確かに塾に通わずとも学年主席を維持しているのだ。特に問題があるわけもなく、父母もあっさり飛鳥の意見を尊重した。
いくら双子とはいえ同じ人間ではないのだから、ずっと一緒にいることなど不可能であるのは当然なのだが、なのははまるで自身と距離をとられたかのような錯覚を覚え、塾に通う度に僅かな寂寥感が少女の胸に去来する。
当人に理由を聞いてみたが、鍛錬の時間があるからと一蹴されてしまった。確かに、恭也(あに)たちも早朝の鍛錬に始まり、学校が終わってからも自宅で鍛錬を行っている。未だ骨格が出来ていないとかで練習メニューは違うらしいが、鍛える時間は彼らと何ら変わりない。

確かにそのような生活サイクルでは塾に通うなど不可能だろう。

「飛鳥の……馬鹿」

けれど、この気持ちは理屈ではないのだ。

「二人ともこっちこっち」

暫し三人で談笑をしながら歩いていると、アリサが二人を呼び止める。彼女が指差すその先は普段自分達が使っていた通学路とはだいぶ違う。

道路は舗装されておらず、大地が肌を晒しており、道を囲うように樹木が立ち並んでおり、外灯など皆無である。今は日が昇っているため通れるが、帰宅時には極力使いたくない、そう思える道が先へと続いていた。

「ちょっと道は悪いけど塾まで大分だいぶ距離短縮(ショートカット)出来るわよ。それではいざ勇往邁進よ！」

「ゆうおうまいしん？」

三人の中でダントツで国語の成績が悪いなのはにとって、四文字熟語など鬼門に等しい。

「目的に向かって一直線ってことよ、ほらなのは、Here(行く) we(わ) go(よ)！」

「日本人であるなのはより日本語を知っているアリサちゃん……この世は無情だね、すずかちゃん」

「な、なのはちゃん一緒に頑張ろう、ね！」

背が煤けて見えるなのはのフォローに回るすずか、彼女の立ち位置に揺るぎはない。

「ほらなのは、何ぼさっとしてるの。私たちに立ち止まることは許されないのよ！」

なのはに落ち込んでいる時間さえ許さないアリサ、彼女の立ち位置に揺るぎはない。

「は～い、行きます行きますよ～」

親友の二人に支えられ平和を享受する高町なのは、彼女の立ち位置に揺るぎはない。

『――――――助けて』

筈だった、あの声を聞くまでは。

◆◇◆◇◆

「ふぅ～」

なのはは深く息を吐く。その表情には安堵の色が浮かんでおり、遣り遂げた達成感が胸に満ち溢れて今にも零れ落ちそうだ。

あのあと聞こえた謎の声、アリサとすずかの耳にはまるで聞こえていない様子だが、ただ一人なのはだけは確かに、はっきりと聞こえていた。

助けを呼ぶ声が。

高町なのはは何処にでもいる小学3年生の女子でしかない、だがその胸には高町家が継ぐ義の心が確かに息衝いている。

誰かが助けを求めている。気付けば少女の意識が向かうより先に体が既に声の発信源へと向かっていた。

しかし、向かった先に居たのは人ではなかった。あれ程明瞭に聞こ

えていた声は確かに人によるものだった筈なのに。

「本当になんだったんだろう」

その声は確かに今思い返してみても不可思議なものだった。

声とは即ち音であり、音を捉えるのは五官の一つである耳の役割だ。外界の音という名の波を鼓膜が捉え、その振動が体内の器官を幾つも経由し、最終的に脳へと送られ、そこで初めて声を認識する。

だがその《声》は違う。

空気の流れを、振動を感じずに、されど確かになのははそれを《声》であると認知したのだ。それはまるで頭に直接語りかけてくるかのように、そう例えば――

「念話（テレパシー）だったり？」

ぽつりと呟いて寸秒、なのはは自身の言葉に吹き出した。まさか漫画やアニメの話ではあるまいし、こんなご近所にＳＦ展開が転がっているというのか。

「飛鳥に言ったら何て反応するかな……」

思いっきり怪しい視線を寄越すか、あるいは生暖かい眼差しを向けるか、二つに一つだろう。その光景が鮮明に映し出され、興奮状態から急速に右肩へと下がっていく。

「それにしても良かった」

なのはが見知らぬ声に導かれて出逢ったのは人ではなく動物、しかも極めて小さい小型の哺乳動物であった。

傷を負っていたその動物を見つけたなのはは、親友達がお世話になっているという動物病院へと急行し診断を依頼した。医師の診断

結果は小さな怪我が数箇所あるものの命に別状はなく、身動き一つしないのは極度に衰弱していたためとのこと。
首輪をつけていたところから、野生動物である可能性は低く。恐らく何処かで飼われていたところ、逃げ出してしまったまま迷子になってしまったと考えるのが自然の流れであり、小学生の無茶な要求に嫌な顔一つせず引き受けてくれた院長もなのはたちと同様の見解を示した。
預かってくれると言ってくれたが、診断料も払っておらず早期に引き取らなければいけない。診断料や預かり先は親友たちが名乗りを上げてくれたが、いくら親しい間柄とはいえ礼儀というものがある。
第一発見者は自分であり、その責任は自分が負うべきだ。
しかし、なのはにその責任を履行できるほどの権限は有しておらず、この件については一家の大黒柱である士郎は勿論、家族全員に伝えなければならない。
意を決して切り出したのは、つい小半時ほど前だ。

「フェレットか〜」

なのはは人差し指を見つめ小さく微笑む。診断後、僅かに意識を取り戻したフェレットは何故か自分を注視していた。最初に見つけたことを憶えていたのだろうか。
舐められた感触を思い出し、緩む口角を止められない。ゴロゴロとベッドの上で転がりながら、次の朝日の到来を今から願う。
暫くの間預かるという、なのはからすればかなりの無茶な願いを家族(みんな)は思いの他、あっさり受け入れた。
これが飼うという話だったら、結果は別だったかもしれない。何しろ実家は洋菓子を製造販売している喫茶店であり、小動物の飼育などとてもではないが不可能であることくらい、なのはにも理解できた。
ふと、勉強机に置かれた携帯電話をその視界に納めたなのはの眉間に皺が寄る。

「自力で起きられないなのはに飼育なんて出来るのか、だって……」

弟の声色を真似ながら先の言葉を再生(リピート)したなのはは頬をリスのように膨らませながら、ジタバタと足で空を漕ぐ。

「出来るよ、出来るもん！　見てなさい飛鳥、お姉ちゃんの本気を！」

と、いそいそと携帯電話のアラームの設定数値を弄る。いつもより音量を大きく、そして複数設定することで二度寝を防止、正に完璧な布陣(ラインナップ)。その非情の鉄壁っぷりに思わず戦慄するほどだ。

「今日は早めに寝ておこう」

これで起きれなかったら飛鳥が増長するのは目に見えている。その鼻っ面を折るためにも、失敗は許されない。いつもより半時以上早いが背に腹はかえられない。

明日の授業の教科書を鞄に入れると部屋の電気を消し、もぞもぞと愛すべき伴侶(ふとん)と同衾する――筈だった。

『――――――えますか』

雑音(ノイズ)が部屋に、いや少女の意識に反響する。

『――――こえますか』

それは徐々に鮮明に、明確に『音』から『声』へと変換される。

『聞こえますか』

「夕方の時の声!?」

慌てて周囲を見渡してみるが、視界に入るのは見慣れた自室の風景であり、『声』の主と思しき存在は見当たらない。
そして、その『声』からは何処か切迫した、緊張感を含んだものであり、なのはの意識は否応なく鋭さを増していく。カーテンで外界との情報を遮断していたが、見えずともその『声』がどちらから発せられているか意識を集中する。

『僕の声が聞こえる貴方、お願いです。僕に、少しだけ力を貸して下さい！』

その方向から、『声』の正体が誰なのか。研ぎ澄まされた感覚が、ある存在を捉える。本来ならば一蹴されるだろう、しかしなのはは何故か確信を抱いていた。

「あの子（フェレット）が喋っているの？」

自分で言って信じられない内容なのに、少女の本能はそれを是としていた。

『お願い、僕のところに！　時間が、危険がもう――っ!!』

ブツリと、強制的に回線を遮断したかのような不快感さがなのはの脳内に駆け巡り、思わず顔を顰める。突如として聞こえた『声』はまた唐突に途絶えた。
何かが起こっている、それは間違いない。しかし余りに荒唐無稽、例え家族に伝えたとしても笑い話で終わってしまうだろう。
だが、その声を確かに聴いた少女にとってはもはや笑い話では済まされない。あれほど逼迫した声をなのはは聞いたことがない。あるとしてもドラマや映画といったあくまで作り話（フィクション）の中でのものであり、このなのはが住む現実の世界では話は別だ。

「――やるしか、ないよね」

何が起こっているのか、未だ全貌を知らない。けれど、助けを呼んでいるのだ、それだけで動く理由として充分の筈だ。例え、大した機転が利く頭脳を持っているわけでも、優れた身体能力を持っていなくても、自分にも何か出来ることがある。

なのははそう、己に言い聞かせる。

とりあえず、寝間着から動きやすい私服をタンスの中から引っ張り出して急いで着替えると、足音を殺して階段を下りる。

顔を伸ばして周囲を見渡すと人影は見受けられない。

時刻は九時を回っている。一人で外に出歩くには不自然な時間であり、もし家族の誰かに見られたら止められるのは明白だ。

士郎（ちち）は恐らく入浴中、桃子（はは）は夕食の後片付けをしているのだろう、微かに食器が擦れる音が少女の耳朶に当たる。恭也（あに）と美由希（ねえ）、そして飛鳥（おとうと）は言わずと知れた鍛錬の真っ最中の筈だ。

「それじゃ、ちょっと行ってきます」

小声でそっと言い残すとなのははゆっくりと扉を閉める。

空は漆黒に染まっており、点在する星達が静かに少女の頭上で瞬き続けている。

「よし！」

頬を叩いて気合を入れるとなのはは一人、夜の道を駆け出す。逸る気持ちに後押しされて足を動かすが、その気持ちに体は適応出来ず、すぐに息が上がり始める。

学校の体育という時間を他に、碌に体を動かしていないのだ。体力がないのは当然だ。

荒くなる吐息と心臓の鼓動と戦いながら、なのはは直走る。

目指す先は槙原動物病院、後の少女にとって生涯忘れえぬ場所の名だ。

「はぁ……はぁ……つ、着いたよ～」

慣れない長距離マラソンに息絶え絶えのなのははどうにか目的地へと辿り着く。その到着時刻（タイム）を知ったら少女は驚いたことだろう。当人の身体能力を加味すれば中々の記録といえた。

診断終了時間を優に過ぎた病院の中は当然、人影もなければ灯りもない。光のない建造物は何故か本能的に恐怖を引き起こす。

しかし、尻込むわけには行かない。『声』は確かに此処から聞こえたのだ。

「――――またこの音」

敷居を跨いだ瞬間、なのはは思わず耳を塞ぐ。超高音の周波、例えるなら黒板を爪で引っ掻くような不快音が脳裏に反響する。先の『声』を聴いたときも同様の現象が起こっていた。

その原因をなのはが知る筈がない。

「一体何なの」

少女の疑問に答えてくれる者はおらず、奇想天外な展開が次々になのはを襲う。

思わず脳裏に響く音に耐え切れずに目を閉じていたなのはが瞼を開けると、景色が一変していた。

昼夜が一瞬にして逆転したというわけではなく、夜空から星々が姿を晦ましたわけでもない。ただ、周囲の色が不思議な色に塗り潰されていた。

それだけではない、人影はなけれど周辺にあった生命の波動が突如まるで感じられなくなってしまった。まるで廃墟に一人佇んでいる

かのような圧倒的な孤独感になのはは体を小さく震わせた。
寸陰、病院内で突如轟音が鳴り響く。
「な、何、何なの⁉」
なのはが今まで聞いたことのない人為的な破壊音に、身を竦ませその発信源へ目を向けると僅かに開かれていた窓の隙間から小さな影が一つ、飛び出す。
その正体を少女は知っていた。
「あのフェレット！」
超常現象のオンパレードについていけず思考が停止しかけていたなのはにとって、それは最良の気付け薬となった。
棒立ちとなっていた足に突如力が戻り、慌てて駆け寄ろうとした瞬間、窓が甲高い音を立てて砕け散った。
何かが強引に飛び出してきたのだ。
それを目にした瞬間、体が金縛りにあったかのように動かず、なのはは思わず唾を飲み込む。それが一体なのか、少女の理解の範疇を遥かに超えていた。
生物として当然ある筈の輪郭が定かではなく、まるで炎のように常に揺れ動いている。禍々しい瞳と獰猛な牙は見えるのに、腕もなければ脚もなく、代わりに触手の様なものが絶えず揺れていた。
そもそも、あれが本当に生物なのか、なのはには確信を持てない。
「流石に、病院に運ばれた患者さん、じゃないよね？」
氷の彫像のように凍ってしまった顔の筋肉が引き付けを起こす。
なのはの理解など置き去りにして、事態は急転し続ける。正体不明

の生物は明らかにあのフェレットを狙っていた。未だ痛々しい包帯を身につけたフェレットをまるで極上の獲物のように、執拗に牙を剥く。

「あ、危ない!?」

なのはの言葉に反応したのか、フェレットは跳躍する。寸時、フェレットが立っていた樹木が圧し折れる。事態はそれだけでは済まされない、木を粉砕し、その向こう側にあったコンクリートの外壁すら易々と破壊する。

まるでトラックが激突したかのような惨事を眼前でまざまざと見せ付けられ、少女の体は完全に大地に縛り付けられてしまう。

「わわっ!?」

軽やかな宙返りを決めたフェレットが懐の中に納まる。その生命の熱に、恐怖に凍り付いていた精神が僅かに持ち直す。

「来て、くれたの?」

「……えっ」

しかし、その精神をあろうことか眼下の存在が木っ端微塵にしてくれた。

「喋った!?」

フェレットが、日本語を、そんな馬鹿な、漫画じゃあるまいし、でも日本人より日本語が出来る日系ハーフがいるのだ、日本語を喋るフェレットがいることだって別に可笑しくは――

「あるに決まってるよ!?」

頭を抱えたくなる事態の連続に、なのはの頭脳が過熱（オーバーヒート）を起こしそうだが、そうなればどうなるか、彼女の中にある僅かに残った理性が、本能がそれをギリギリのところで踏み止まらせていた。

しかし、未だ正気を保っているからこそ、その異形な生き物のその異質さが否応なく理解できる。

あれは、あってはならないものであると。

だが、その心とは裏腹に、少女の体は一刻も早く逃げるべきだと最大級の警告を発し続けていた。

生物とは最早呼べず、正に魔物と呼ぶに相応しいその怪物の破壊衝動に満ちた瞳が、ついになのはにも向けられる。

その瞬間、まるで蛇に見込まれた蛙の如く、なのはは体を完全に硬直させてしまう。

産まれて初めて味わう純粋な敵意と、人一人容易く壊してしまえる暴力を前に毅然と立ち向かえるほど

、少女は強くはなかった。

「駄目だ、逃げるんだ！」

フェレットの声がやけに遠くに聞こえてくる。大きく跳躍し、自分に迫るそのバケモノを前に、なのはの意識は急速に鈍化する。

いや、むしろ逆。迫る命の危機に、脳が限界まで覚醒しているのだ。生き残る術を模索するために。

極限まで伸ばされた時間を前に、なのはの脳裏に様々な人物がまるで泡のように浮かんでは消える。

これが、走馬灯なのかな？

士郎（ちち）が、桃子（はは）が、恭也（あに）が、美由希（ねえ）が、アリサが、すずかが、大切な人たちの顔が鮮やかに蘇っては溶けて消える。

そして、誰より鮮明に映るのは我が半身、魂の片割れ。

目前まで迫る死を前に、なのはは気付けばその名を叫んでいた。

「飛鳥あぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

その声に――

「聞こえてるよ、なのは」

少年は応えた。

第五話　Ｇｏ　ｔｏ　ｂｌａｚｅｓ

眼前の思念体に限らず、周囲に意識を集中していた彼にとってもそれは想定外の声だった。

声の主は懐に己を抱え、迫り来る理不尽な暴力を前に酷く怯えさせてしまった、自分の『声』に答えてくれた少女にとても良く似ていた。

――――双子、なのかな？

「あ、飛鳥？」

栗色の髪を左右に髪紐で結った少女なのはは、想定外の来客の姿にまるで幻を見たかのように呆然としている。

「何を呆けている」

「い、いたたたっ!?」

突如、飛鳥と呼ばれる子は思考停止に陥っていた少女（なのは）の頬を無造作に掴み引っ張る。そこに遠慮などまるでなく、結構な痛みが発生しているのは彼の目にも明らかだった。

痛覚という生命にとって必要不可欠なその感覚に叩き起こされた少女の瞳に涙が浮かぶのは人として当然の反応といえる。

「いきなり何をするわっ!?」

言葉は最後まで続けられることはなかった。彼も突然の衝撃に声を発することが出来ない。視界が一瞬にして流転するが、ヤツへの警戒を解かなかった。

だからこそ、理解する。

つい寸刻まで自分たちがいた場所に思念体が駆け抜けたのだ。危

機一髪だったことに気付かされ、冷や汗が一つ流れる。
轟音と共に外壁が一瞬にして破壊される。相変わらず驚異的な突進力だ、人など軽く蹴散らせるだろう。それこそ、この少女など。

「何、何なの!?」
「落ち着けなのは、老けるぞ」
「何で!?」

顔を上げれば、未だ自身の状況を把握できず目を瞬かせる少女の顔が見える。そして、ある変化に気が付く。あれほどまで恐怖に身を縮ませていた少女の瞳に明確な意思の光が灯っていた。
その燈火にあれほどまで凍てついていた肉体も、ぎこちなくはあるが彼女の意思に反応し、二本の足でしっかりと大地を踏み締め、隣に立つなのはに良く似た顔立ちの少女、飛鳥に食って掛かっていた。

「そんなことはどうでもいい」
「良くないよ！　女の子にとって美容は命の次に大事なことだよ、たぶん！」
「わかったわかった、話は後にしてくれ」

なのはの抗議を柳のように受け流していた少女（あすか）の視線が一瞬、自分へと注がれていることに気付く。

――――落ち着いている、本当に。

顔立ちはなのはと瓜二つだが、その精神は恐ろしいほど隔離している。少女の瞳には動揺の欠片さえ見受けられず、ただ水面のように何処までも澄んでいた。
彼女にとっても、今の現状が何処までも日常と乖離していることに何ら変わらないというのに。

「そこの貴方」
「は、はい！」
　自身の現在の形態ではまず考えられない飛鳥の丁寧な物腰に、思わず姿勢を正し答える。その反応に少女が小さく笑っていることに気付き、思わず頬を赤らめ身を縮ませる。
「済みませんが状況を説明してもらえますか？　正直、何も分かっていませんので」
「も、勿論です！」
　少女は小さく頷く。何処までも自然体なその立ち姿に思わず見惚れていたが、ふと気づく。
　いつの間にか、彼女のその手に一振りの刀が握られていることに。

高町飛鳥は夢をみる　第五話　～Ｇｏ　ｔｏ　ｂｌａｚｅｓ～

「僕はある捜し物をするために、信じられないかもしれませんが此処とは違う世界から来ました」
　自分で言っておきながら何だが、彼らにとって何と現実味のない言葉だろうか。未だ、次元への進出を果たしていない管理外世界にとって、この説明にどれだけの説得力があるというのか。
　しかし、他に言いようがない。誤魔化そうにも、協力を要請するには真実を話さなければ力の譲渡は不可能であり意味をなさない。正に八方塞の状況といえる。
　だが、存外彼女たちは拍子抜けするほどあっさり自分の言葉を信じ

た。

「違う世界？　つまり、世界は複数存在すると」
「はい。僕らでの世界とは次元世界、即ち数多の次元が並列して存在する多元世界の総称を指します」
「へぇ～色々な世界があるんだ、じゃあ竜（ドラゴン）とか天馬（ペガサス）とかいるの？」
「え、えぇ両種とも次元世界でも希少種に入りますが確かに存在します」
「凄～い、一度見てみたいね飛鳥」
「分かったから、さっさと走れ！」
「は、はぃ！」

飛鳥の檄に背を蹴飛ばされ、なのはは必死になって足で大地を漕ぐが、その顔には疲労の他に不満が色濃く表れていた。

「飛鳥こそ木刀なんか恰好良く持ってるんだから、早く何とかしてよ！」
「出来たらとっくにしてる、わ！」

少女の裂帛の声と共に一陣の風が吹く。飛鳥の木刀と思念体が激突したのだ。本来なら木で作られただけの刀など一撃で簡単に折れる筈なのに、何合と打ち合っているが未だ彼女の手に握られる刀は原型を留めていた。
彼には理解できていなかったが、飛鳥は思念体の突撃に対し、全身をクッションにひたすら木刀で衝撃を外へと逸らしていた。
未だ致命傷を受けていないとはいえ、その衝撃力は計り知れない。例えるなら、常に大型車と正面衝突しているようなものだ。無事でいる時点で異常ともいえる奮闘ぶりだ。
その証拠に飛鳥の吐息には熱が篭り、頬に一筋の汗が流れる。一見、それこそなのはたちから見れば余裕をもってあしらっているように見えるが、そうではない。

常に薄氷の上で独り踊っているようなものだ。

「あれを倒すには物理的な力では駄目なんです」

「じゃあどうするの!?」

なのはの悲鳴は最もだ。今現在頼れる戦力は飛鳥のみ、その彼ですら防戦一方でとても反撃できるとは思えない。そこに、剣では倒せないときた。確かに匙を投げたくもなるだろう。

そんな状況下でも飛鳥は冷静であった。

「他に方法があるんですね」

「はい」

頷き、二人を見据える。飛鳥となのは、この二人が此処にいる時点でその術がある。

「アレを倒すには資質がいるんです」

「資質？」

世界を書き換える力が。

「そうです、魔法の資質が」

「まほう～？」

魔法――神秘を宿す秘術、神の遺産、悪魔の置き土産、管理外の世界にも溢れる神話の秘法。しかし、次元世界には確かに存在する。

だが、それは望めば何でも叶う願望術ではなく、確かに体系付けられた技法の名称だ。

怪訝な表情を浮かべるなのはだが、管理外の世界の住人にとってそれは当たり前の反応であり、彼にとって落胆する要素とは成り得な

い。
考えてもみるがいい、見知らぬ人からいきなり「貴方は勇者です」などと告げられるようなものだ。まず相手の正気を疑うだろうし、自分だってまず信じないだろう。
だからこそ、御伽噺のような荒唐無稽な話にまるで驚かず受け入れる飛鳥にこそ驚く。

「その資質が私たちにある、と」
「信じるんですか？　自分で言うのも何ですがこんな与太話を……」
なのはの背後に控えながら、木刀を振るう彼女に思わず零してしまった言葉という名の不安。それを拭い去ってくれたのもまた、彼女だった。

「信じますよ。少なくとも、私が知っている常識ではフェレットは喋りませんから」
「そうだよね～私もびっくりしちゃったよ」
「は、はは……」

自分の今の見た目で判断されたことに悲しめばいいのか喜べばいいのか判断に困っていると、突如飛鳥の足が止まる。

「飛鳥？」
「――先に行け」

飛鳥（かのじょ）の声色が変わった。語調が落ち、声に感情が乗らずまるで人形が発したかのようだ。なのは（こちら）から背を向いており、少女の顔を窺うことは叶わないが、恐らく冷たい表情を浮かべているだろうことが容易に想像できる。

「で、でも！」

一緒に逃げようと、伸ばした手をなのはは途中で止める。
彼にも確かに理解できた、飛鳥から立ち昇る闘気というものを。魔法によるものではない、人の、意志の力が身体から迸っていた。
その熱気にまるで空間が揺らいでいるようにすら見える。
それに呼応するかのように、いやそれに対応するために飛鳥は足を止めたのだろう。
先程まで思念体（アレ）は執拗になのはを、いや自分を狙っていた。その理由は分かっている。
しかし、今は違う。明らかに標的を自分から飛鳥へと切り替えている。目の前を飛び回る小さな蠅に業を煮やしたのだろう。
確かになのはと自分の安全を考えるなら、その選択は間違いではない。だが、それに生じる不利益（デメリット）は全て彼女が引き受けることになる。
なのはが飛鳥の身を案じるのは当然と言えた。

だが、飛鳥は一蹴した。

「いいから逃げるんだ！」
「うっ!?」

振り返った飛鳥（かのじょ）のその表情に、声に、なのはは口を噤み目尻に滴を浮かべると、黙って踵を返し走り出す。
その背に帰ってきたのは、彼女の声ではなく、思念体の咆哮と鈍い激突音であった。

◆　◇　◆　◇　◆

あれからどれだけ走っただろうか。先の場所からかなりの距離を稼ぐと、少女の足はパタリと止まってしまう。

「どうしよう、どうしよう飛鳥が、飛鳥が！」

「落ち着いて！」

――いけない、軽い恐慌(パニック)症状を引き起こしてる。

先程まで取り戻してつつあった平常心が揺らいでいる。見た目に寄らず頑強(タフ)な精神の持ち主だと感心していたが、どうやらそうではなかったようだ。

なのはがすぐにその精神を立て直したのは飛鳥(かのじょ)の存在があったからこそ。恐らく余程信頼を寄せているのだろう。肉親への感情というのは特別なものだ。あの顔立ちから察するに双子の姉妹だろう。

精神の拠り所を失った少女(なのは)の精神は酷く不安定な状態に陥ってしまった。

『落ち着いて!!』

なのはの耳に声が届かないと判断した後は早かった。即座に脳へ『声』を大音量で叩きつける。

効果は劇的だった。

一瞬肩をビクつかせると、己の懐に抱く小動物へと視線を移す。瞳に焦点が合っていることが分かり、思わず安堵の息が零れる。

「落ち着いたかい？」

「う、うん……ごめんなさい」

「謝ることはないよ。むしろ謝るのは僕の方だ、ごめんなさい……僕のせいで君たちを巻き込んでしまった」

そう、責める権利などある筈がない。目の前の惨状は自分が引き起こしたも同然なのだ。むしろ罵倒されて然るべきだ。

「そんなこと、今気にしている場合じゃないよ。早く飛鳥を助けないと！」

しかし、彼女はそんなことに目もくれない。なのはの瞳に映るのは未だ見えぬ肉親の姿。立ち昇る煙が少女の不安を掻き立てる。

「さっき、言ってたよね。私たちには資質があるって」

「うん」

資質は間違いなくある。何故ならば今、この一帯を覆う結界内で活動できるのは魔法資質を有する者だけだ。その中で、こうして自分と対話をしている時点で、証明されている。

後は、どれだけの資質を有しているかという点に尽きる。

「その資質があれば魔法を使って、飛鳥を助けてあげられるんだよね？」

ここでうんと、肯定することは容易い。しかし、確信を持って言えるほどの資質を持っているかはデバイスを起動させてみないと分からない。

寸陰迷ったが、正直に少女の問いに答える。それが巻き込んでしまった者としての最低限の礼儀だ。

「今の君ではまず彼女を助けることは不可能だ。でも僕の力を、杖（デバイス）を貸せば可能性は確実に上がる。でも、つまりそれは君がアレと戦うということをも意味する。僕が言うのもお門違いかもしれないけど、やれるかい？」

「か、かの……とりあえず飛鳥を助けられるんだったらやる、やります！」

何かを言いかけたが、なのはは拳を握りしめ、宣誓する。

彼女の精神は年相応で戦闘に耐えられるか、不安の種は探していたらきりがない。

当初は現在、殿(しんがり)を務めていた飛鳥に託そうと思っていた。的確な状況判断能力、揺るがない強靭な精神、どれも十分に合格点だ。
だが状況がそれを許さず頼れる者は今の現状、彼女(なのは)を置いて他にはいない。
やるしか、ない。

「これを」

首からぶら下げていた赤い宝石、デバイスをなのはへと渡すと、儀式用の魔法陣を展開する。新規使用者の設定を組まなければ、例えいくら杖が高性能だとはいえ、その力を十全に発揮できない。

「これは？」
「君の力となるものだよ」

――どうか、上手くいってくれ。

プログラムを最速で組み上げると祈る気持ちで可能性(なのは)に起動パスワードを告げる。その結果――

「なんて、魔力だ」

眼前の光景をただ呆然と見つめる。
圧倒的、そう形容するより他の言葉が見つからない。自身が保有する魔力量と、文字通り桁が違う。その湧き上がる魔力になのはの体はゆっくりと上昇している。指向性を持たせていないただの魔力の奔流だけで人を浮かせるとは規格外にも程がある。
どれだけの資質を持っているのかと戦々恐々していたが、蓋を開けばそれはただの箱ではなかった。
それは禁断(パンドラ)の箱、だったのかもしれない。
本来ならば目覚める筈のなかったチカラ、それが今、目の前で爛々

と輝きを発していた。

「何、何なのこれ？」

天を貫いていた桜色の魔力光が集束し、その中から現れた少女の恰好は先程のものとは全くの別物に変わっていた。

その魔力量と相反する初心者の態度に何とも言えない表情を浮かべながら、彼女の疑問を解消すべく口を開く。

「その杖（デバイス）、レイジングハートから聞かれませんでしたか？　身を護る衣服の姿を想像しろって」

「言ってました、とりあえず聖祥（せいしょう）の制服を思ったから、それで……」

興味深そうに自身の服を眺めていたなのはだが、再度鳴り響く轟音に表情を引き締める。何が起こっているのか言われるまでないだろう。

彼女が、闘っているのだ。

「飛鳥……お姉ちゃんが今助けに行くからね」

〈Ｆｌｉｅｒ　Ｆｉｎ〉

待ってと、静止の言葉を放つ前に少女の靴に桜色の翼が生える。それを感知した瞬間、なのはの保護服（バリアジャケット）にしがみつく。

次の瞬間、猛烈なＧが襲い来る。落とされまいと四肢に力を込めながら驚嘆する。

――まだ何も知らない筈なのに飛行魔法を、まさか感覚で組んだのか、魔法を、こうも簡単に!?

魔法とは自然摂理や物理法則をプログラム化し、それを任意に書き換えることで術者の望んだ作用に変える技法であり、それには当然計

算式や法則が数えきれない程存在する。それを感覚で組むなど常人には到底不可能な所業である。
天才、その言葉が今、現実に目の前に存在する。
なのはが必死になって走った数分の距離をものの数十秒で走破する。運動神経が皆無な彼女にとってその速度は正に光速。
その速度は彼女の逸る心そのもの。

「速く、もっと速く！」

まるで滑るように流れる景色などまるで眼中になく、少女はただ一点を見つめる。

「見つけた！」

その言葉になのはは急停止をかけると、そこに待ち受ける光景に愕然とする。
アスファルトで舗装されている筈の道路が点々と抉り取られ、或いは壁が粉砕され、去ってものの数分で日常が戦場と成り果てていた。
そんな中、彼女は見た、いや見てしまった。

「はぁ……はぁ……」

荒い息を吐く飛鳥のその口元に触れるものがある。
赤い、赤い滴だ。
それが探し求めた者の血であることに、なのはは暫く気付かなかった。
額を切ったのだろうか、眉間から垂れる生命の滴は絶えず流れ落ちる。傷口は額だけに留まらない、腕に脚に、良く見れば至る所に裂傷を負っていた。
無理もないと、異世界の魔法使いは眼下の光景を歯痒い思いで見つ

める。
あの思念体にいくら物理攻撃を加えたところで、効果的なダメージは絶対に有り得ない。アレを核としている以上、元を絶たなければいくら攻撃したところで再生するだけだ。
何度もぶつかり合ったためだろう、その手に持っているのはもはや原型を留めておらず、木の棒きれと化していた。
しかし、飛鳥は未だ大地に立っていた。
眼前に聳える敵を前に、一歩も引かず、その眼光に一点の曇りもない。
闘うと、護ってみせると、その背が無言で語っていた。

「GLUUUU!!」

襲い来る化物を相手に飛鳥は手に持っていた木刀だったものを躊躇することなく投擲する。しかし、当たる瞬間、思念体から生える触手によって阻まれてしまう。
だが、それも想定済みと言わんばかりに飛鳥は胴を回し流れるような動きで大地を蹴ると、空を舞う。上体を捻じるように巻き込んで放たれる回し蹴りはその小さな体格に不相応な威力を発揮する。
自身の何倍の体積のあろう魔物を蹴り飛ばすという快挙を成し遂げるが、それだけだ。敵の勢いはまるで衰えない、むしろ増してさえいた。
僅かとはいえ危害を加える害虫(あすか)に思念体は敵意を燃やす。その意思がそのまま、力となっているのだ。

最初に遭遇した時より遥かに増殖した触手の群れが飛鳥を襲う。少女は怪我をしているとは思えない身軽な動きで回避し続けるが、どこか精彩を欠いているようにも見受けられる。

「駄目だ!?」

いくら声を嗄らしたところで飛鳥(かのじょ)が躱せるわけがないのに、それでも叫んでしまう。神懸かり的な回避運動を取り続けていた彼女だが、僅かに鈍った挙動が致命的となる。触手に足を取られ、大地へと体を叩きつけられる。そこに遠慮など存在しない。

まるで蠅を叩き潰すかのように、何処までも荒々しい。それを執拗に繰り返す。何度も、何度も。

その惨劇を、なのはは身体を小刻みに震わせながら、ただ茫然と見つめていた。

少しは気が晴れたのだろうか、無造作に少女を放り投げる。その勢いは日常ではまる体感できない速度であり、大地と並行滑空していた飛鳥の体は始まりの地、槙原動物病院へと吸い込まれる。

破壊音が連鎖し、数刻を持ってようやく音が途絶えた。

「GLAAAAAAAA!!」

思念体の咆哮が結界内を震撼させる。視線を病院から思念体へと移せば、その体に何かが突き刺さっていることに気付く。

数本の針がいつの間にか、その体に埋め込まれていた。誰がやったのか、考えるまでもない。

――なんて娘(こ)なんだ。

あれだけ痛めつけられて、傷ついて、まだ戦うことを止めようとしない。

それを証明するかのように、大穴が空いた屋敷から一人の少女が姿を現す。

「……レイジングハート」

ここで初めて、少女の口が動く。その立ち姿は何処までも静かだ。

しかし何故だろうそれを見つめるだけで腹の奥底から湧き上がるこの感情は何だろう。
思い出す、その感情の名前は――恐怖だ。

突如、吹き荒れる魔力の嵐。魔導師なら即座に反応できるほどの大魔力に思念体も当然反応する。ヤツからすれば、逃した筈の獲物がわざわざ戻ってきたようなものだろう。
跳躍し、思念体はその触手を振りかざす。本来ならば絶体絶命の局面だ、しかし、そんなものより目の前にいる少女の方が何倍も恐ろしい。

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

杖（デバイス）が術者の意思を読み取り、術式を展開する。
あれほどまで自身を苦しめた攻撃をいとも容易く防ぎきる、それも完璧にだ。その圧倒的な出力で展開される魔力障壁は外航艦の装甲を髣髴させる。
そよ風一つ発生しない無敵の盾、だが未だ恐怖は遠退いてはいない。

「ねぇ……」
「は、はい！」
飛鳥（かのじょ）に良く似た声なのに、何故だろう……背筋が凍る。

「どうすれば、いいのかな？」
「え、えぇっとあれを停止させるには思念体の核、ジュエルシードを封印して元の状態に戻さないといけないんです」
「封印……ね」
突き付けた杖はまるで最後の審判を告げる神か魔王のように見え

る。

「その前に」

轟と、圧倒的な魔力がレイジングハートに注がれるのが分かる。分かるからこそ、恐ろしい。そこにどれだけの力が集っているのか否応なく理解できるが故に。

障壁を突き破ろうと障壁に火花を散らしながら突進する思念体を前に、なのはは不動の姿勢を崩さない。一瞬、彼女の視線が眼下の飛鳥へと向けられる。

少女の歯軋りが、耳朶にこびりつく。

無造作に振るわれた杖に付き従うように、思念体の体は突如上空へと放り出される。恐らく障壁の衝撃反射角度を操作したのだろう。初心者にあるまじき技巧だ。

満点に瞬く星を背景に、なのはは杖を突き上げる。

赤き宝玉（レイジングハート）を起点に環状の魔法陣が多重形成される。それに伴って鳴動する大気の悲鳴。

思わず唾を呑み込む。これから起こるだろう光景に、身を固くする。

今のなのはは爆発寸前の火薬庫だ。それもとびきり危険な爆薬物を詰め込んだ極めて凶悪な。それが今、解き放たれようとしていた。

少女は穏やかに告げた。

「Go（お） to（仕） blaze（置） s（き）（だ）（よ）」

閃光が天を貫いた。

目も眩むような桜色の魔力光がまるで洪水の如く溢れ出る。思念

で出来た仮の肉体はその砲撃によって、一瞬にして蒸発する。再度復元しようにも体を構成する分子を消し飛ばし続けているのだ、再生のしようがない。
その余りに圧倒的な破壊力に心胆が震える。これが地上に放たれたなら、その被害は思念体が及ぼしたものより遥かに酷いものになっただろう。

光の奔流が止むと、先の怪物の姿は何処にもなく、宙には蒼穹を思い起こさせる青い宝石が浮かんでいた。

「それがジュエルシードです、封印をお願いします！」
「レイジングハート、封印をお願い」
〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ〉

なのはの呼び声にレイジングハートは形状を封印に適した形へと自律変形する。

〈Ｓｅａｌｉｎｇ.　Ｒｅｃｅｉｐｔ　ｎｕｍｂｅｒ　ＸＶＩ〉
「ありがとう」

赤い宝石の中にジュエルシードが吸い込まれるように姿を消す。とりあえずの当面の危機を防いだことに思わず安堵の息を吐く。
しかし、新たに産まれた魔導師にとって、ロストロギアの回収など二の次だろう。

「飛鳥、飛鳥ぁ！」
「なのは……また面白い恰好をしているな」

満身創痍の筈なのに日常（いつも）と何ら変わらぬ飛鳥の態度になのはの瞳に浮かんでいた滴はその行き場を失い引っ込んでしまう。

「冗談言ってないでじっとしてて、レイジングハート！」
〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，Ｐｈｙｓｉｃａｌ　Ｈｅａｌ〉
「おぉ、怪我が塞がっていく。凄いななのは」

傷口が徐々に塞がっていくといった、正に魔法の恩恵に飛鳥は目を年相応に輝かせる。

「レイジングハートが頑張ってくれてるんだよ」
「そうか、ありがとうレイジングハートさん」
〈Ｄｏｎ'ｔ　ｗｏｒｒｙ〉

翳された杖に頭を下げる飛鳥に自律行動型デバイス（レイジングハート）は即座に返答する。

先程の激戦は何処に行ったのか、思わず目を疑いたくなるような和気藹々とした彼女たちの会話に思わず二人を凝視してしまう。

飛鳥となのは、第９７管理外世界にて出会った二人の少女を前に、この先どうなっていくのかまるで想像が出来ない。

規格外の魔力量を誇る天才魔導師と年不相応な精神と不屈の闘志を秘めた剣士、一癖も二癖もある彼女たちと異世界の魔導師、ユーノ・スクライアは運命の邂逅を果たす。

その出会いが何を齎すのか、人の身である彼には分からない。

されど、ただ一つ分かることがある。それは――

「飛鳥は弱いんだから無理しちゃ駄目だよ、これからはお姉ちゃんが守ってあげるから安心して」
「なのは、今聞き捨てならない発言を耳にしたような気がしたが気のせいだよな？」
「耳まで悪くなっちゃったの？　まったくしょうがないな～お姉ちゃんが治してあげるよ」
「何だろう、この敗北感は……」

自分が苦労するだろうということだ。